

2016 (平成28) 年度

千葉県 NIE 実践報告書

(*Newspaper in Education* = 教育に新聞を)



市川市立大和田小学校
鎌ヶ谷市立北部小学校
銚子市立船木小学校
勝浦市立郁文小学校
鋸南町立鋸南小学校
習志野市立袖ヶ浦西小学校
八街市立笹引小学校
浦安市立富岡中学校
流山市立常盤松中学校
神崎町立神崎中学校
大網白里市立白里中学校
鋸南町立鋸南中学校
野田市立東部中学校
茂原市立早野中学校
南房総市立富浦中学校
千葉市立打瀬中学校
千葉県立佐原高等学校
千葉県立東総工業高等学校
専修大学松戸高等学校
千葉県立四街道特別支援学校

千葉県 NIE 推進協議会

重要性増す新聞を理解する取り組み



ご挨拶

千葉県N I E推進協議会会長

藤川大祐

(千葉大学教育学部教授・副学部長)

平成28年度より、千葉県N I E推進協議会会長をつとめさせていただくこととなりました。

私は教育方法学が専門で、メディアリテラシーやディベート、キャリア教育といった新たな領域を中心に授業プログラムや教材を開発する研究をしています。微力ながら、千葉県の学校におけるN I Eの推進に貢献できるよう、つとめさせていただきたいと思っております。

インターネットの普及以降、メディアの変化は加速を続けています。世界の情報流通量は指数関数的に増加しており、情報の量だけで言えば、人類が過去に発信してきた情報の総量よりこれからの短期間（1年あるいは数年）で発信される情報量のほうが多いことが想定されます。

こうしたメディア状況の変化は、新聞のあり方をも大きく変えつつあります。小中学生の家庭で新聞をとらないところが増える等、一見すると若い世代には新聞の役割が小さくなっているように思えるかもしれませんが、しかし、新聞記事はインターネットを介してさまざまな形で読まれており、新聞社から発信された記事の影響力はこれまで以上に高まっているとも考えられます。テレビが登場し、映像による伝達や情報の即時性でテレビが優位に立っていましたが、インターネットの普及は新聞社が発信する情報にテレビ以上の即時性を与えるとともに、複数の記事を比較して読んだり、読んだ者がSNSを通して言及したりと、多くの人が新聞記事を能動的に活用するようになっていきます。

このように考えれば、インターネット時代の今だからこそ、新聞について理解する取り組みが重要だということがわかります。新聞の紙面はどのように構成されており、記事の種類にどのような特徴があるのか。それぞれの記事はどのような過程を経て作られているのか。こうしたことを意識しながら読むことで、私たちは適切に新聞記事を活用できるのだと思われれます。

私個人としては、A I (人工知能) の普及による社会の変化や米国トランプ政権誕生後の世界情勢のあり方等が気になっており、こうしたテーマに関連する記事に特に注目しています。他方、千葉県内の地域の情報にももちろん関心がありますし、教育に関しては特にいじめの問題に関する記事は漏らさず読みたいと考えています。読みごたえのある記事やタイムリーな記事に出会うことを楽しみに読んでいます。

N I Eの推進により、学校に通う児童生徒が、学校で新聞についての理解を深め、それぞれの関心を広げつつ関心に応じて記事を活用できるようになってもらえることを願っています。今後とも、関係の皆様のご理解、ご協力をいただきたく、お願い申し上げます。

目 次

小学校

市川市立大和田小学校	1
鎌ヶ谷市立北部小学校	4
銚子市立船木小学校	8
勝浦市立郁文小学校	11
鋸南町立鋸南小学校	13
習志野市立袖ヶ浦西小学校	15
八街市立笹引小学校	18

中学校

浦安市立富岡中学校	20
流山市立常盤松中学校	23
神崎町立神崎中学校	25
大網白里市立白里中学校	27
鋸南町立鋸南中学校	30
野田市立東部中学校	32
茂原市立早野中学校	34
南房総市立富浦中学校	37
千葉市立打瀬中学校	39

高等学校

千葉県立佐原高等学校	43
千葉県立東総工業高等学校	45
専修大学松戸高等学校	47

特別支援学校

千葉県立四街道特別支援学校	49
---------------------	----

N I Eの日常化

市川市立大和田小学校 鈴木 美菜・流 雄希・佐野 貴紀・山浦 清香
河野 太郎・福馬 伸隆・富永 加代子

1. はじめに

今年度重点課題としてN I Eの日常化を目指し、生活科ルームの一角にN I E広場を作った。作品・新聞・はがき新聞用紙等を誰でも必要に応じて手に取れるようになり、活用の場が広がった。本校の高学年児童の家庭で新聞をとっているのは60%程度。新聞は家庭にあるものでなくなっている現状にあって、市川市では4年生以上の各クラスに1部ずつ4紙の新聞が毎日届けられること、本実践校の特典として8紙が4か月間届けられることで学校に自由に読める新聞があることは意義深い。新聞記事を家庭に持ち帰り家族で読み合い、話し合う機会を持つこと(ファミリーフォーカス)で家族を巻き込み、家庭学習としても効果を上げている。

日常的に新聞を使うだけでなく、自分や他者との関わりの中で新聞を活用し、そこから得た自分の考えを新たに発信することを目指して実践に取り組んだ。

2. 実践内容

<回し読み新聞>



回し読み新聞とは、自分の好きな記事を選び、それを友達と交換して読み合う活動である。わからない事は調べ、記事の内容を要約して家族と一

緒に読む。次に、4人グループで持ち寄った記事に対して感想を言ったり、自分の知っていること交流させたりして考えを深める。更に廊下に掲示して、ほかの児童も読む。その後の顛末を帰りの会などで取り上げる。

<新聞で戦争について学ぶ>

教科や読書教育と融合させて理解を深めた「戦争について考える」は3回のシリーズで実施した。1回目は5月、オバマ氏が広島を訪問というビックニュースを捉えて道徳との関連で扱った。ここでは、この一件を全員で共通理解した上で行った。新聞社から戦争についての特番をいただき参考にした。2回目は7月、国語科「川とノリオ」の学習後に原爆被害者で語り部の方を招いて話を聞き、感想をはがき新聞にまとめた。3回目は9月、夏休みに集めた戦争関連のスクラップ記事を持ち寄り、戦争について自分の考えを交流し合う活動を行った。



<新聞で遊ぼう>(6年生の出前授業)

総合的な学習の時間で、6年生が1年生にも新聞に親んでもらおうと出前授業を行った。新聞の絵や文字から1年生が喜びそうな遊びを考え、双六、紙芝居、神経衰弱、カブトのプレゼント・

ゲームや紙芝居・文字探しゲーム・メッセージづくり等を縦割り活動のペアの児童と行い楽しい時間を過ごした。この活動を受けて2年生が神経衰弱作りをした。



6年生から1年生の出前授業

<新聞で世界を見てみよう>

一目瞭然！世界まる見えのニュース地図。新聞の中から世界のニュースを集めて、世界地図に貼る活動だ。「今、世界で何が起きているのか！」が分かり、それを見て意見や感想の交換を行った。



<今日のニュース>

毎日のニュースを日直が切り抜いてコメントを書いた。また、火曜日の朝自習の時間にみんなで手分けして記事を切り取ったものをファイルの分類ごとにスクラップした。記事を入れるのも出すのも、利用するのも自由にした。



<教科学習への新聞の導入>

4年生「1つの花」では戦争の実感のない子供達に、昨年夏休みに掲載された戦後70年という特集をもとに記事を読んだり、スクラップをしたりした。読みの不十分なところは、家庭の協力を得た。

5年生「大造じいさんとガン」では新聞に掲載された椋鳩十さんの記事を印刷してみんなで読み合った。このことで本文の読みが深まった。この記事をきっかけに、命の大切さを考えて、記事を集めて道徳の学習へとつながった。



<切り抜き新聞>

夏休みから自分の気になる記事を集めておいたものを工夫して貼り、自分の考えを表す「切り抜き新聞」に挑戦した。「要約」「調査」「感想」を、「家族の意見」を取り入れ全体の構成を考えて仕上げた。「見出し」は自分の考えがはっきり分かるように、また紙面を読みやすくする工夫をした。



新聞で新聞を作る

3. 結果

○新聞により、今、世の中で起きていることを知り、世の中の出来事に関心を持てるようになった

た。

- 新聞に載っていることを自分の経験や状況と照らし合わせ、他人事でなく自分に何ができるかを考えるようになった。
- 読解力や文章力がついて、沢山の情報の中から、自分の考えを整理できるようになった。
- 政治や経済のことについて、大人と対等に話し合うことが出来て満足感を得た。
- 新聞遊び出前授業は、1年生に喜んでもらえて苦勞の甲斐があった。
- テロや争いのニュースが多い中から、「何かいいことないか」とページをめくり、タイで元Jリーガーが子供たちにサッカーを教えたという記事を見つけた。
- 切り抜き新聞では、見せ方を工夫することで、自分の思いを効果的に相手に伝える方法が身についた。



NIEひろばの設置

4. 考察

- 毎日のニュースを切り抜いて朝の会で発表する活動は、毎日継続することにより大きな力となる。一冊のノートに貼り、コメントを書くというのは効果的である。
- 新聞をタイムリー、かつ臨機応変に教材として活用することで教科学習が活性化され、児童の生活を豊かにすることが出来る。
- 指導者が組織的にかつ、継続的に新聞教育に取

り組み、思考力・判断力・表現力を高め、主権者教育の基礎を築く必要がある。

- 教科のみならず、道徳や読書教育とNIEを関連づけさせることでより深く、より広く子ども達の力を伸ばすことが出来る。
- 6年生による出前授業のように、新聞教育も有意義で楽しい活動であれば、横にも縦にもつながって広がっていく。
- 新聞には、たくさんの情報が載っているので、読み手の意識や視野によって多様な扱い方が出来る。世界まる見え新聞地図の感想交流では、次は良いニュースを見つけたいという感想も飛び出した。

5. まとめ

写真資料からも窺える通り、真剣に新聞を読む児童の姿、新聞に親しみ互いに心を通わせて楽しそうに活動している姿に、「新聞教育は人間教育である」と感じる。

子供たちに私たちが出来る事は、新聞を有効に活用して組織的に、かつ、継続的に研究を重ね学習をデザインしていくこと。広く世の中を見つめ、人と関わり社会と関わりながら自分の在り方を考えられるように、アクティブな新聞教育を実践し、その可能性を追求していくことが望まれると考える。

この夏休みは、リオオリンピックで盛り上がったが、その裏で、結婚式にテロだとか、目の不自由な男性が線路に転落したり、高校球児や応援する人々のドラマがあったり、考えたいことや伝えたいことがたくさんあった。自分の立っているところより、一步広げて、また一步深めて、背伸びしてみるツールとして新聞を活用していきたい。

「ふれる・読む・考える・つくる」実践を全校で！

～N I Eはアクティブ・ラーニング～

鎌ヶ谷市立北部小学校 本宮 武憲

1. はじめに

(1) 実践の方向性

本校のN I E実践は、今年度が指定校としての2年目である。昨年度は、実践テーマを「ふれる・読む・考える」とし、既存の校内研究テーマの「伝えあう力の育成」と関連づけ、全校をあげて各学年・各学級の実態に応じた様々な実践を行った。

その結果、課題として「授業におけるN I Eの位置づけをさらに追求したい」「新聞記事を書く力をつけたい」ということがあげられた。

そこで、今年度の実践テーマを「ふれる・読む・考える・つくる」として、授業づくりと新聞づくりに一層の力を入れることとした。

(2) 実践の具体化

- ①全校で取り組む。(委員会活動や学校図書館の機能も取り込む)
- ②N I E実践のための共通実践をおこなう。
- ③「学校N I Eコーナー」と「学級N I Eコーナー」の充実を図る。
- ④授業におけるN I Eの位置づけを考える
- ⑤新聞づくりを「紙面づくり」「記事を書く」に絞って全学年・全学級・各組織で行う。
- ⑥学期ごとの各自が実践記録を作成する。

2. 主な実践内容

(1) 「ふれる」

①「自己紹介」をしよう！【全学年】

新聞の戸別配達購読家庭が5割以下という実態(昨年度調べ)のなかで、児童が日常的に新聞にふれる機会はその多くない。

また、低学年児童はその機能について、ほとんど理解していないのが毎年の実態である。

そのような実態の中、昨年度、低学年は紙面から知っている文字や好きな写真などを探すと、この実践から新聞の存在を知り、新聞には知らせたいこと(以下、情報)が載っていることを学んだ。

今年度は、その実践に連続するものとして、「新聞を使って『自己紹介』をしよう！」を全校で行った。始まりは、特別支援学級における「ふれる・読む」実践の一つであったが、全校で各学年のレベルに応じた「自己紹介」をすることとした。

この実践では、少なくとも以下の3点の主体的な活動が確保できる。

- i. 児童が自身について紹介したい内容をより多く書き出す活動
- ii. 紹介に適した記事や写真等を紙面から探す活動
- iii. 紙面に構成(デザイン)する活動

なお、本実践は図工的な要素も強くあることから、子ども達から興味・関心の点から高い評価を得た。毎年実践して、個人の学習の深化を観るには好適で基本的な形態だといえる。



【3年生の作品】

②ペイパートーク【全学年】

“新聞とは何か？”という基本的な問いに応える実践として、今年度取り組んだ実践が「ペイパートーク」である。

これは学校司書がおこなっている「ブックトーク」という読書案内方法にヒントを得たものである。

内容としては、低・中・高学年用と三種類の指導案を作り、各々、新聞の役割・紙面づくりなどの工夫・歴史などについて紹介するものである。

素材として英字新聞や外国の新聞、業界新聞などを含む複数の新聞を使い、新聞というものの広がり示した。

この実践を通して、児童は新聞の全体像をコンパクトに学び、新聞の見方を多角的にし、一層の興味・関心を持つことができた。



【2年生への「ペイパートーク」の様子】

(2)「読む」

①「コラム」を読み書き写す【4年生】

4年生が4月から取り組んだのが、小学生向け新聞の「コラム」を書き写すことであった。書き写す行為は読む行為ともいえる。

対象の新聞は、小学生向けの新聞であるため、漢字にはふりがなついているので読む行為はできるわけである。

また、書き写した後で、どんなことが書いて

あったかの確かめを行うことで、「読む」行為を理解にまで導くことができた。

最初は書き写すだけで手いっぱいだった子ども達も2学期には苦も無く書き終えるようになり、内容理解の点でも格段の向上をみせていた。

「読む」ために「書き写す」ことは、小学生には極めて効果的な方法であるといえる。



【朝自習の時間に書き写す4年生】

②「読む」から「考える」に

本校の既存の校内研修のテーマは「伝え合う」である。そこで校内研修では、そのための「授業におけるNIEの位置づけの追求」「新聞記事を書く力をつける」について、一定の方途を見出すことを主な目標とした。

1) 6年生：国語におけるNIEの在り方

国語の教材である『意見を出し合おう：未来の自動車－パネルディスカッションをしよう－』で、新聞記事から「排気ガスからCO₂を回収し商業利用する施設」「交通安全装備の充実した車」などを読み、未来の自動車についてグループで構想し、図解のある新聞にまとめ、パネルディスカッションを行った。

新聞記事から視点を探し、それを補強する調べ学習を展開した子ども達は自信をもって他のグループと質疑応答を行っていた。

各グループの発表がつながる形になり「深

い」学習に迫る実践であったといえる。



【大型モニターでプレゼンする6年生】

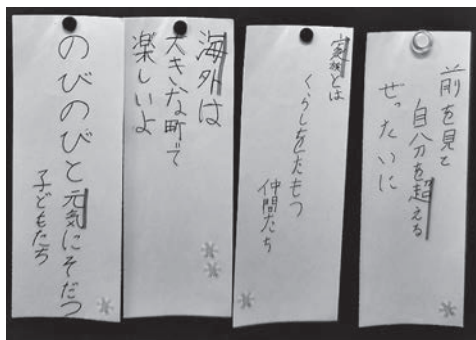
2) 4年生:総合「新聞から言葉を探して五・七・五を作ろう」

4年生は新聞を読み、その中から「五・七・五」の表現になりそうな言葉、使えそうな言葉を探して俳句のような「五・七・五」にして考えたことを伝え合う授業を展開した。各自がつくり、相互に評価する形態であった。

子ども達は、膨大な文字の量から自分の必要とする文字をみつけることができるようになった。紙面の構成を知り、見出しから記事の概要を予想できる子が増えてきたためだ。

アメリカ大統領選挙、都知事問題など時事問題にも関心が非常に高くなった。

また、見つけた文字から、五・七・五を作ることで、短いフレーズの中に、自分の気持ちを込めて表現する力を確実につけてきた実践である。



【作品例、小さな星印が高評価の証】

(3)「つくり」伝え合う

①1年生:生活科「きゅうしょくセンターのことをしらせよう」【考え・つくる】

今年度の実践テーマのひとつが「つくる」である。そこで1年生は「はがき新聞」をもとにした合体型新聞作りに取り組んだ。取材対象には子ども達の関心が高いであろう「給食センター」を選定し、その紹介をする新聞づくりに取り組んだのである。

実践を通じ、実際に見学し、働いている人に話を聞いたりしたことで、1年生でも最後まで記事を書こうという意欲が持続した。自分が知った情報を共有する場を設けることによって、正しい情報を伝えることができた。

また、集団の思考を通すことによって、見学したときのことを思い出して進んで書くことができた。

さらに大きい新聞にまとめたことで、自分や友達の記事のよさを振り返ることができた。

「見出し」をつけることの困難さはあったものの1年生でも合体型新聞を「つくる」ことができるという実証ができた。



【編集作業の様子】



【廊下に掲示された2クラス分の新聞】

②5・6年生：総合「あさか活動を引き継ごう！」【つくり、交流する】

5・6年生は3学期に、本校伝統の縦割り集団活動の「あさか活動」について新聞にまとめ、相互に伝え合う交流会を設けた。

6年生から5年生には「あさか活動」の運営上の具体的なアドバイスとリーダーとしての心構えなどを新聞にした。5年生から6年生へは1年間の感謝とリーダーを引き継ぐ覚悟などを様々なインタビューやアンケート・データを盛り込んだ新聞として表現した。

「あさか活動」をグループとして新聞にまとめたことは過去になく、参考となるものは多くなかったが、2年間で培った新聞表現の学習の成果で素晴らしい新聞が作成できた。

5年生の発表交流会では参加した6年生からアドバイスや助言が出され、5年生のリーダーとしての自覚は一層高いものとなった。



【5年生の発表交流会、手前は6年生】

③「深い学び」を得るために、「記事」を書くことが有効であることがわかった。

④学校司書や放送委員会活動の実践は、NIEの実践の可能性を広げるものとなった。

(2) 課題

①NIE実践を総合的な学習として行う場合、その「対話的で」「深い学び」をどのように実現し評価するか。

②NIE実践で培った学力を他の教科等の学習にいかに関移していくか。

③「記事」を書く力の充実のための方法。

3. 2年間のまとめ

(1) 成果

①全校あげての実践だったため継続性が保たれ、児童の新聞への興味・関心が持続し、その活用方法、新聞制作の技能が高まった。

②授業への活用法の研究が進み、授業力が向上した。

ふれる・調べる・考える

銚子市立船木小学校 玉崎 宗弘

1. はじめに

本校は、平成27・28年度にN I E実践校の指定を受け、研究を進めてきた。テレビやインターネット、携帯電話やスマートフォン等で、いつでもどこでも簡単に情報が入手できる現在、新聞から情報を取り入れることが少なくなっているのが現状である。しかし、表現力や語彙不足が問題視されている現代の小学生にとって、新聞は情報を入手するだけでなく、適切な日本語の使い方や文字・写真を活用した表現方法など、学ぶものは多分野にわたる。文字離れしている子供たちに、まずは「新聞に親しませよう」を主目的とし、新聞の豊富な情報量や表現の素晴らしさなどに直接触れ、関わりを深めるなど幾つかの実践に取り組んできた。

2. 実践状況

(1) 環境整備(新聞コーナーの設置)

本校では、毎日届く数社の新聞を、いつでも誰でも閲覧できるよう、多目的ホールに専用コーナーを設けて展示した。



多目的ホールにN I Eコーナーを設置

職員室に届いた新聞をホルダーに掛けるのは6年生の担当。その日の新聞を各紙毎に設置し、昨

日までの新聞をロッカーに保管していく。休み時間になると、ホールに集まり、数人で興味深く新聞に目を通す児童の姿が見られるようになった。当初は、テレビ番組表や三面記事、スポーツ面あたりを見ている児童が大半だったが、次第に一面のトップ記事にも関心を持ち始め、「これ、昨日のニュースでやっていたよ。」などと言いながら、友達と一緒に記事を読む姿が見られるようになってきた。

(2) 新聞を活用した学習活動

本校では、「新聞にふれる」「新聞で調べる」「新聞から考える」というように、1年生から6年生までの全学年で、新聞を活用した実践に取り組んだ。

【第1学年 図画工作】

まだ、文字をよく読めない1年生は、図画工作の材料として新聞を活用した。大きな文字のあるところや写真のあるところ、カラー印刷してある場所など、新聞の紙面の特徴を生かした図画工作の実践である。特徴を上手に選んで人形作りをする姿が見られた。



1年 新聞紙で人形作り

【第2学年 学級活動】

「多様化するランチ」というタイトルの新聞記事を元に食育の授業を実施した。昔の給食のメニューや給食の様子を紹介した記事を読み聞かせ、家の人に昔の給食についてインタビューした。



2年 今と昔の違いを確かめる



2年 ワークシートで発表し合う

その内容をワークシートにまとめて発表した。2年生は今の給食との違いに、驚きを見せていた。

新聞をきっかけに食生活を振り返る学習へと発展した。

【第3学年 理科】

全国各地の天気や気温などを、新聞を元に調べた。天気と気温との関係は全国どこでも同じ傾向が見られることが理解できた。毎日新しい情報が提供される新聞のメリットを生かした学習となった。新聞ならではの活動である。



3年 過去の天気予報を集める

【第4学年 国語】

新聞の見出しは、一目見ただけで内容を容易に想像することができる。短い言葉で的確に表現がされた見出しの良さに気づき、国語の作文の題名

づくりに生かした授業実践である。子供達は自分の作文の内容を考えながら、言葉を選んで題名をつけることができた。



4年 新聞の見出しを参考に

【第5学年 社会】

国語、社会、総合…と新聞を授業で活用することは多く、子供達は新聞に慣れ親しんできた。今回は、「新聞を活用した授業」という冊子を活用した実践である。

新聞記事に乗っていたスポーツ選手の名言について取り上げた。新聞記事の中には、たくさんのスポーツ記事を取り扱ったものがあり、その中から印象に残った言葉を選び、その理由を書く活動を行った。

子供達にとって親しみやすいのはスポーツの内容。選手の名言を見つけては、どういう思いが込められた言葉かを考え、友達と共有し理解を深める姿が見られた。関心の強い記事に接することにより、新聞により親しみを感じることができた。



5年 有名選手の言葉を探す

【6 学年 総合的な学習の時間】

自分の興味や関心にそってテーマを決め、新聞記事を集めた。記事に対する簡単なコメントや感想を書く活動に取り組んだ。また、感想にとどまっていたコメントも、自分の考えを基に意見を述べたりするようになってきた。内容はスポーツや政治、外交、文化、地域情報など多岐にわたった。次第に記事に対する強い気持ちや自分の考えを表現できるようになった。



6年 関心の高い記事を選ぶ

3. 結果

本校の児童は、新聞自体の存在は知っていたものの、内容や中身については、興味・関心が薄かった。しかし、学年の実態に応じて新聞に触れる機会を持つことにより、新聞に親しみ、楽しんで関わりを持つことができるようになってきた。

低学年では、素材としての活用や記事の読み聞かせにより、学習活動に深まりが見られるようになった。また、インタビューなどの活動を通して学校内だけでなく家庭にも活動の場を広げることができた。

中学年では、自分で実際に記事を読みながら、学習に必要なデータを集めたり、わかりやすい表現の例として新聞記事を活用したりすることで、情報収集能力・情報活用能力などを高めることができた。

高学年では、今まで話題に挙がらなかった政治関係のニュースや外交問題などにも興味を示し、社会的視野に広がりが見られるようになった。新聞に触れていくうちに、一番知らせたい・関心の高い記事は、1頁に大きく取り上げられていることや、見出し→リード→本文へと次第に詳しく記述されていることなど、構成上の工夫にも気づくようになってきた。

また、5W 1Hを生かした文章のまとめ方を作品作りに活用することで、わかりやすく伝える工夫ができるようになってきた。その他見出しの言葉の選び方や感嘆符(!)や疑問符(?)を使った作品が見られるようになり、視覚的な効果を加えながら表現を工夫するようにもなった。N I Eの実践を通して身近な紙媒体である新聞の良さを再認識することができ、これからの活動にも生かしていきたい。

4. 考察

子供達の身の回りには、テレビやインターネットなどからの情報があふれている。

情報量が多いが、正確さを欠いたり、一過性の物になり易かったりという一面も持っている。

そうした生活の中で、子供達の活字離れが懸念されている。新聞のような紙媒体の情報は、信頼性の高さや活用のし易さが、学習活動に生かしやすい。

このN I Eの実践を通して、新聞の持つ良さを再認識し、子供達の活字離れに歯止めをかけ、活字に親しむ機会が増えてきたと感じている。

新聞を活用した授業作り

勝浦市立郁文小学校 佐藤 江理子

1. はじめに

本校では、平成27年度からN I E教育推進の指定を受け、本年度が2年目の取り組みとなる。校内研究では、国語科で「自分の思いや考えを持ち、伝え合うことのできる児童の育成～N I Eの活動を通して」を研究主題としている。昨年度の反省をもとに、言語活動の充実を目指し、効果的に新聞を活用した日常実践や授業実践についての研修を深め、全学年で授業展開を行った。2年目に実践してきた取り組みについて紹介したい。

2. 実践内容

(1) N I Eコーナー

N I E教育を実践するにあたって、新聞に親しませるために、全校児童がいつでも新聞を閲覧できるようにN I Eコーナーを設けている。毎朝3年生の新聞当番が数社の新聞をN I Eコーナーに並べながら、その新聞をよく見ており、新聞が届くのを楽しみにしている。毎朝N I Eコーナーに行って新聞を読むことが日課となっている児童が多くなった。朝のスピーチやニュースの紹介などのために写真を見たり、見出しを読んだりして、日常実践に生かすことができた。



N I Eコーナー

(2) 各学年の国語科での取り組み

1年生 「かたかなをみつけよう」

2年生 「ことばあそびをしよう」(複式学級)

1年生は新聞記事から片仮名を探し、見つけた片仮名をワークシートに書く活動を行った。記事の書いてある順に片仮名探しをすることによって自然に新聞記事を読めるようになった。2年生は新聞記事から片仮名や知っている言葉探しをした後、新聞から選んだ言葉を使って折り句作りを行い、言葉で遊ぶ楽しさも味わうことができた。1・2年生共に新聞は小学生新聞を拡大したものを用意した。



新聞から言葉探し1・2年

3年生 「秋の楽しみ」

4年生 「秋の風景」(複式学級)

新聞から秋の季節のいろいろな行事や秋の様子を伝える情報を見つけたり、紹介し合ったりした。日常実践では、新聞記事からみんなに知らせたいものの写真や絵などを選んで自分の考えを書いて紹介したり、朝のスピーチで今日のニュースの紹介をしたりして、新聞を身近な情報を得る手段として活用を図ってきた。



新聞記事を読んで感想を書く 3・4年

5年生 「理由づけを明確にして説明しよう」

「未来のために今の暮らしについての意見文を残す」というゴールを提示し、自分の考えを裏付ける資料として、新聞記事のグラフや統計などの資料を活用した。統計資料を使っている新聞は教室に置き、並行読書にも取り組んだ。資料探しを通して、新聞が児童にとってより身近な存在となった。



新聞のグラフを分類して掲示 5年

6年生 「町のよさを伝えるパンフレットを作ろう」

「郁文小のよいところをパンフレットに分かりやすくまとめて書き、交流のある長野県飯山市立東小学校の6年生に届ける」というゴールを提示し、パンフレットを作る上で新聞作りでの効果的な紙面作りの方法も取り入れた。また、新聞の紙面作りのよいところや教師の作成したパンフレットや実物のパンフレットを参考にしながらパンフレット作りに取り組ませた。



大枠で紙面作り 6年

わかば学級 「調べたことを整理して書こう」

(特別支援学級)

「新聞」を発行するという単元のゴールを設定し、みんなの好きな遊びなど児童の興味がある内容を記事にして、単元を通して興味がもち続け

られるようにした。日常の活動として、新聞に親しむために記事を見て、見出しを付けるとい



記事に見出しをつける わかば

う活動も行っている。また、ワークシートを工夫して、毎時の授業を進めていくことで記事の内容を少しずつ書き上げられるようにした。完成した新聞は、交流学級の3・4年生に渡して感想をもらうことで、満足感や成就感を味わわせることができた。

3. まとめ

(1) 成果

NIEコーナーを設けたことで、新聞を手にする児童が増え、朝の日直スピーチやニュース紹介や授業などで新聞を活用することができるようになった。各教室でも掲示物を工夫してNIEの環境を整え、児童も教師も新聞を身近なものと感じることができた。

NIE活動を通して、国語科では自分の考えをまとめ、友達や教師、保護者に自分の思いを伝えることができるようになった。国語科の授業で新聞を取り上げたことで、他教科にもよい影響を与えた。特に社会科や理科、総合的な学習の時間などで、グラフを読み取る力や、記事をまとめ自分の考えを発表する力が伸びた。

(2) 課題

NIE活動を通して全学年で新聞に親しむようになり、新聞を読む児童が増えた。今後もこの意欲が持続できるように、教師も指導力を高め、効果的に新聞を活用した授業展開の工夫をしていきたい。

新聞の効果的な活用方法

鋸南町立鋸南小学校 安田 淳

1. はじめに

本校は、昨年度N I E教育実践校となり、本年度が2年目である。昨年度は「どの様に新聞を教育活動に取り入れていこうか」からスタートし、実践を重ねていった。本年度も、その取り組みを更に充実させていくことに重点を置いている。

2. 実践状況

(1) 児童の手による新聞閲覧コーナー

毎朝、環境委員会の児童が教室前の廊下にある新聞閲覧コーナーで各社の新聞を取り替えている。新聞に目を通しながら、取り替えている係もある。休み時間になると、それらを読み、談笑している高学年の姿も見られる。



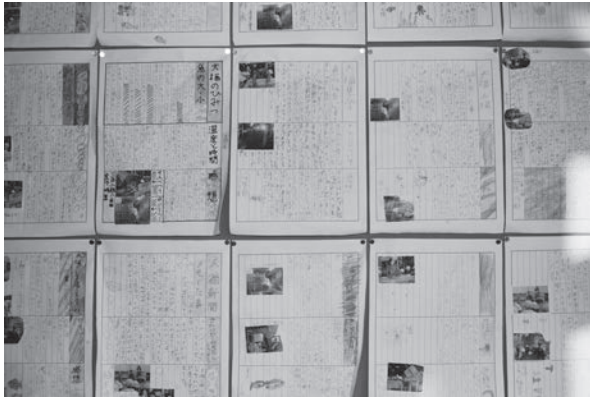
(2) 必要な情報を新聞記事から探す

6学年の総合的な学習では、自分たちの住んでいる町の未来を考える学習をした。町の課題と改善点を世代別に考えていく際、他の地域の状況を知るために、新聞から関連する記事を探し、資料として活用した。



(3) 新聞のレイアウトの参考にする

3、4年生では社会科や総合的な学習で、調べてきたことを一人一人が新聞としてまとめている。その際、どんな見出しをつけたら目を引くか、どうレイアウトすると新聞らしくなるかなど、グループで話し合い、個々で新聞を作成していった。



(4) 新聞記事を掲示物に

本年度はリオ五輪が行われ、児童も大いに関心を示した。夏休み中のことであったが、五輪関連の新聞記事から掲示物を作成し、二学期早々掲示した。それを見た児童は、五輪種目を調べたり、他の新聞記事にも興味を示していた。



3. 結果

(1) 児童の手による新聞閲覧コーナー

自分たちで新聞を取り替えることに、児童達は新聞を身近に感じる1つとなっていた。また、一部であるが、学習内容に関する記事を集め、学級で紹介する児童も見られた。

(2) 必要な情報を新聞記事から探す

特集記事からは、多くの情報を集められることを実感した児童もいた。また、新聞によって、表し方に違いがあることを感じた児童もいた。

(3) 新聞のレイアウトの参考にする

新聞が段組になっていることや写真が複数の段にまたがっていることを見つけ、同じようにレイアウトしようとしていた児童もいた。

(4) 新聞記事を掲示物に

掲示物は夏休み明けになったが、感動を再度味わっている児童も多かった。新聞にはカラー刷りの写真も多く、掲示物としても有効であった。

4. まとめ

普段、家では新聞に触れない児童がほとんどである。校内に自由に読める新聞があることは、新聞を身近に感じさせている。また、新聞にはいろいろな情報が掲載されていることが改めてわかった児童も多い。発達段階に応じて、教育活動への新聞の活用の仕方は違うが、新聞の利用価値は感じてくれている。低学年では計画的な活用はしなかったが、他校の活用方法を参考に、今後は有効活用をしていきたい。

キャリア教育の視点から新聞活用を考える

習志野市立袖ヶ浦西小学校 白戸 雄一

1. はじめに

平成28年度のNIE実践校の指定を受け、6年生で実践を行った。いわゆる社会事象を読み取るものにしようか、各紙の一面を比較する活動にしようか…、どのような取り組みにするかを探ってきた。新聞は情報の海である。文章も大人向けで、難しい漢字も多い。読解力に個人差のある中、小学校で実践するには、ある程度テーマを絞った形がよいのではないかと考えた。

例年本校の6年生は、キャリア教育として、職業体験施設に行く。その時期に合わせて仕事についての学習をする。そこで今年度は、新聞をキャリア教育に取り入れて、「将来のこと」、「社会と自己とのかかわり」について考えさせていくことにした。



2. 実践報告

(1) 「新聞」と「ひと」について

どの新聞にも何かを成したり頑張っていたりする「ひと」について紹介する記事がある。記事自体に「ひと」や「人」と題字がついている新聞も多い。直接、人に焦点をあてた記事ではなくても、何らかの出来事には必ず人がいる。今回の実践で

はその「ひと」に着目した。



(2) 実践方法と実際

新聞の「ひと」欄を毎日切り抜き、各自読みたい記事を選ぶ。その人の「職業」、「行っていること」、「その人や記事が伝えたいこと」をまとめ、感想を書かせた。要約しやすいようにワークシートを使用した。毎日行わず、記事がクラスの人分たまってくると取り組む、というペースで行っていった。

新聞から『ひと』にせまるう	
名前 ()	
今日の人物	
職業	_____
_____	_____
どんな人? (何をしてきた人か・何をしようとしている人か)	

その人が(その記事が)伝えたいことは何か?	

新聞記事は、はじめは自分たちで紙面を読み、選ばせようとしたが、児童の実態からこれは難しい活動であった。「『ひと』に着目した記事を選ぼう」と声をかけたのだが、実際に1日分の紙面を

渡されると、どの記事を選ば良いのか迷ってしまう子どもが多かった。また、教師からすると、もっと人に迫った記事があるのに、その記事を選ばずに、安易にスポーツ選手の記事を選ぶことも多かった。子どもが活動のねらいに即した記事を適切に選ぶには、あまり時間をかけずに新聞全体を通読し、その中から、ふさわしい記事を取捨選択する能力が必要になる。限られた時間の中で、それを行うことは難しく、活動の途中からは、教師があらかじめ記事を選び取りしておくことにした。子どもたちは教師が選んだ記事の中から自分の読みたい人の記事を選び、その人について読み取るようにしたことで、課題にせまることができた。

個々でまとめたワークシートは学級での発表を行い、掲示することで、クラスで共有した。

職業体験施設に行く前には、職業についてのまとめを行い、職業の数や、どのようなカテゴリーに分けられるか、今の自分にはどのような職業が向いていそうか、といったことを考える授業を行った。



(3) 「ひと」の記事からわかること

記事から、大きく二つのことを押さえた。ひとつは記事の人物の「職業」である。小学生には耳慣れない職業名も多く、子どもたちは「これはどんな仕事？」と言いながら興味をもって新聞を読

んでいた。NPOの方についての記事も多くあり、単純に職業と括れないものがあることも子どもたちは知った。工業新聞などは、工場や研究施設などで働く方が多く紹介されていて、一般紙とは違う面白さもあった。

職業体験施設に行く前に、たまったワークシートからどのくらいの職業が今までの記事で出てきたのかをまとめる授業を行った。板書は、職業のカテゴリー（例「スポーツに関係するもの」「教育」「サービス」「もの作り」など）ごとに分かれるようにした。最終的に黒板には書き切れないほどになり、職業がいかに多様かということについて、自分たちの読んだ記事から感じることができた。

もうひとつ記事から読み取れるものは、その人の生き様である。取り組みや仕事の裏側にある、その人物の思いや、そこに至るまでの挫折や苦労話などがインタビューの台詞を織り交ぜながら書かれている。ワークシートには、「どんな人？（何をしてきた人か・何をしようとしている人か）」と「その人が(その記事が) 伝えたいことは何か？」という欄を設けた。

これらのことについて読んでいく中で、記事になっている人たちが、それぞれの役割の中で精いっぱい生きて社会に貢献していることを知ることができた。

3. まとめ(成果と課題)

「ひと」の記事は、小学生が読むのに、ちょうど良い分量であった。また、その分量の中に職業、経歴、その人自身の言葉など実によくまとめられている。一面の事件などを読もうとすると分量が多いし、個人でのまとめでは新聞をどのように貼るかを考えるだけでも難しさがある。その点、人に焦点を絞ったことで大々的な取り組みにはなら

ないが、児童一人一人がしっかりと読解し、考えることのできる取り組みとなった。

子どもの感想も変容した。回を重ねる毎にその人のことだけではなく、自分と重ねるようになっていった。「自分は～だけど、この人は～なので、…」といった感想が見られるようになった。高学年のキャリア教育には、「社会と自己とのかかわりから自らの夢や希望をふくらませる」という視点がある。本実践では、人の生き方を読み取っていく中で自分に向き合い考えることができるようになった。このことは大きな成果と言える。

課題としては、やはり新聞というものが、本来大人向けに書かれているという点である。子どもの発達には個人差がある。今回の実践は、個による読みが中心だったため、読解力に課題を感じている児童には難しかった。6年生で、テーマを絞り、記事の分量や内容も教師が精査した上で、ようやく実践が可能となった。記事の選定については教師が行ったが、これは大変な労力を要した。本来なら子どもたち自身が新聞全体を読んだ上で記事を選ぶ力をつけたいところであるが、そのためには新聞を読むことに慣れる必要があり、時間の確保や家庭との連携などの課題があると考えられる。今回は、職業の多様性、記事の多様さを求めたが、新聞が潤沢にない指定校ではない学校が実践を行う場合は、同じ記事を印刷して使うことになろうかと思う。

新聞を通して、子どもたちは自分の知らない人の人生に触れることができた。無理なく継続して行うことのできる実践として、今後深めていきたい。

新聞ならではの『よさ』を活かす授業を探る

八街市立笹引小学校 佐藤 一馬

1. はじめに

本校は、本年度よりNIE実践校として指定を受けた。「新聞を実際の授業の中にどのように取り入れていくべきか」をまず十分に考え、実践をしていくこととした。

「ただ新聞を使えばよい」「授業の中に新聞記事を登場させればよい」等、新聞を使うこと自体が目的になってしまっている授業では、本来ある教科としてのねらいに到達することは難しい。教科としてのねらいを達成しつつ、新聞を活用したことで、児童にとって深い学びとなることが重要である。つまり、授業のねらいと新聞ならではの『よさ』が結びついていないと意味がないのではと考える。

本校では、新聞ならではの『よさ』を活かし、児童にとって深い学びとなるよう、授業実践を試みることにした。

2. 実践概要

(1) 4年生 社会科「わたしたちの県」

社会科においては、社会に実際に生きる人々が、何を考え、どんな問題を抱え、よりよく生きようとしているのか、“生の声”を児童に届けていくことが極めて大切であると考えた。

そこで、新聞ならではの『よさ』を以下のように捉え、授業実践を試みた。

社会における“生の声”がわかる

本実践は、小学校4年生の社会科「わたしたちの県」の単元の中のまとめ・広げるの段階での授

業である。児童は、これまで千葉県の地形・土地利用・主な産業について学習してきた。

本時では、平成29年2月4日の新聞記事(千葉日報)を授業の導入に提示した。一面の見出しには、以下のように書かれており、見出しの最後の部分に何が入っているのかを考えさせた。

五輪向け 日本遺産に申請「房総□□」

前提知識として、

①日本遺産の意味と、県内ではすでに江戸を感じる北総四市の歴史的な街並みが指定されていること

②2020年東京オリンピックの一部の会場が千葉県に決まったことを児童に提示した。

世界の人々にぜひ伝えたい千葉県ならではの「すごいところ」は何かを考えさせた。児童はこれまでの学習を生かして、それぞれ予想した。



新聞記事の見出しを隠して児童に提示

以下の項目は、児童が予想として考えた主な内容である。

<落花生> <房州うちわ>

<南房総の花弁栽培> <魚> <野菜>

友達に自分が考えた予想とその根拠を伝え合った後、新聞記事のコピーを配付し、読み合っていくこととした。ヒントとなりそうなキーワードを

見つけること、記事に書かれている地名にアンダーラインを引くという指示を出した。

児童は、記事に出てくる地名がどの場所であり、そこではどんな産業が盛んなのかを地図を活用して考えた。

多くの児童は、これらはすべて海沿いの地名であることに気付き、見出しの言葉が水産業と大きく関係しているのではと予想することができた。児童が見出したキーワードは、以下のものがある。

・なめろう	・さんが焼き
・太巻きずし	・しょうゆ
・大原はだか祭	・潮干狩り

「なめろう」や「さんが焼き」については、詳しく知らない児童がいたため、教師が補足説明を加えた。「魚介」「料理」と答えた児童には、「大原はだか祭」や「しょうゆ」との関係を探ることとした。児童は、「しょうゆ」でおさしみを食べることや「大原はだか祭」は、大漁を祈願する祭であることに気付くことができた。

話し合いを進めていくうちに、児童は最終敵に実際の記事に書かれている「海の幸」を見出す児童もいれば、「古くから息づく海の食文化」「海に対する人々の願い」という意義も考える児童もいた。

(2) 5年生 社会科「わたしたちの暮らしと情報」

ここでは、新聞ならではの『よさ』を以下のように捉え、授業実践を試みた。

読者を想定し、伝えたい情報の優先順位を決めることができる

本実践は、小学校5年生の社会科「わたしたちの暮らしと情報」単元の中のまとめる段階での授業である。児童は、これまで新聞社の見学に行

き、新聞がどのように作られてきたのか学習してきた。

本時は、まずはじめに平成29年1月10日の主なニュースを七つ提示した。児童自身が新聞編集者ならば、どの情報を読者に一番伝えたいかを考えさせた。その新聞社の一番伝えたい情報が一面の「見出し」となることをおさえ、なぜそれを選んだのかを発表し合った。次に、実際の新聞を4紙提示し、どの情報が「見出し」に書かれているか読む活動をした。



4紙の見出しを見比べている様子

児童は、4紙とも一番伝えたい情報が異なっていたことに気づき、なぜ新聞社によって「見出し」が異なるのか、その理由を話し合った。児童は、「読者にとって、いろいろな情報に触れられるからよい」「新聞の作り手は、読者の立場や年齢を意識しているのではないか」等、新聞を作る作り手の思いやメッセージの一端について考えることができた。

3. おわりに

児童にとって深い学びを生み出す手段として、今回は新聞の『よさ』に着目した。今後は、国語科等の他教科における実践の可能性についても探っていきたい。また、児童が新聞と常時触れ合える学習環境づくりも現在、進めている。新聞を通し、児童にとっての新たな学びの機会をたくさん生み出していきたい。

思考力・判断力・表現力を高める指導法のあり方 ～NIE活動を通して～

浦安市立富岡中学校 山本 智子

1. はじめに

今日の社会は、科学技術の進歩や国際化、情報化が進み、暮らしの環境の変化が激しくなっている。このような現代社会に生きる生徒たちには、これからの社会の主体的な担い手として、社会参画力が求められている。これを受け、本校では、NIEで身につけさせたい力として、①情報を収集する能力、②発信する能力、③課題解決する能力を掲げている。

2年目の今年度は、世の中の事象に関心を持ち、課題を把握し、よりよい未来について考え、行動に移すきっかけをつかませることをねらいとし、NIE活動に取り組んできた。

2. 実践状況と成果

(1)「よりよい未来について考えよう」をメインテーマとした総合的な学習の時間の授業実践

①課題の設定

・マインドマップによって、メインテーマに沿った、サブテーマを決定する。

例(環境・福祉・国際理解・情報など)



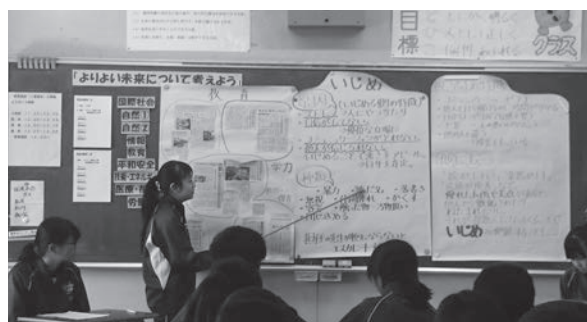
②情報の収集・整理分析

・同じテーマを設定したグループごとに、テーマに沿った記事を収集し、発表し合う。

・情報を整理し、よりよい未来とはどういう未来かを考え、課題を考える。

③まとめ

・収集した情報について、新聞やインターネットを活用し、よりよい未来を目指し、自分たちにできることやアイデアについての結論をまとめ、発表する。



記事の背景にある出来事や歴史などを調べたり、意見交換をする機会を設定するなど、探究する活動や多角的に物事を考えていく活動を行うことで、思考力・判断力・表現力の向上が見られるようになってきた。

(2) 新聞社による出前授業

朝日新聞社が行っている出前授業を活用し、今年度は、記事の要約の仕方や記事を用いたディベートの仕方、インタビューのコツについて学んだ。

具体的に①記事を選択し、1分間で相手に記事の内容を紹介し合う活動、②1つの記事に対して、班で賛成か反対かのディベートをする活動、③人物にインタビューして、その内容から、人物を紹介するための記事の見出しを作成する活動を行った。

生徒の感想から、「他の人がどのようなこと

に興味があるのかということが知ることができた。」「自分がきちんと理解できていないと紹介できないし、限られた時間で要約し、相手にわかりやすく伝えることが難しかった。」「資料を活用しつつ、自分の言葉に直して、沢山意見を出すのが難しかった。また、自分とは違う意見などもいろいろ出てきて驚いた。」「究極の要約を意識し、見出しをつけることの大切さを知った。」などの意見が多く、新聞を活用した活動への関心が高まった。



(3) N I Eコーナーの設置 & 新聞スピーチ

①世の中の事象に関心を持たせるために、N I Eコーナーを設けた。新聞2社の今日のトップ記事を毎日掲示するとともに、中高生新聞も活用し、記事の読み比べができるようにし、新聞を身近に感じることができた。



②昨年度から継続し、クラスで1日2人、気になった記事のレポート(記事の紹介・記事の

感想や意見)を作成し、帰りの会で1分間スピーチを行った。また今年度は、その記事や感想に対する意見を、他にも2人程度発表する活動を行った。他の人の考えを聞いた上で、限られた時間の中で自分の考えをまとめる思考力の向上に繋がった。

3. N I E活動を行ったアンケート調査の結果

(意識が高まったと答えた全体に対する割合)

語彙力が高まった	79%
自分の意見や感想を持てるようになった	70%
まとめる力が向上した	67%
文字を書く速度が速くなった	67%
社会情勢に興味を湧いた	65%
新聞を読むことが増えた	51%

4. まとめ(今後の課題)

アンケート結果から、2年間の取り組みを通して、意識が向上したと感じた生徒が、どの項目も過半数を超えている。これらを受けて、教育活動に新聞を用いる有用性を2つあげる。

1つ目は、新聞が生徒の社会への興味や関心を抱かせるきっかけとなるということである。新聞はリアルタイムで世の中の出来事を報道してくれる。世の中で何が起きているのか、問題点は何なのかを知ることができ、興味のあることについてさらに調べ、自らの課題として捉え考えることによって、社会に参加していくことができる。

2つ目は、自分の意見を持つとともに、人の意見を知ることができるということである。特に本校は、自分の考えや思いを文章にまとめ、発表することはできるが、資料を活用して、考察し、説得力のある説明をしたり、主張することについて

は苦手意識を抱いている生徒が多い。また、互いに意見を交換するような活動を好まず、他者の意見を取り入れ、自分の考えを深めることについて慣れていない生徒も多い。そのような中で、身近な話題を題材にして、様々な立場の人の気持ちに立って物事を判断することで、他者理解に繋がったり、感想や意見が違うことで、様々な視点から考えることができ、また、深く探求し理解することで、説得力のある説明をすることができる。

今後の課題としては、新聞をじっくり読む時間を確保するということがあげられるが、関心ある社会事象についての1分間スピーチなど、自分の意見を発信する活動や探究する活動、多角的に物事を考えていく活動を継続して行い、更なる思考力・判断力・表現力の向上を図っていきたいと考えている。

「生きた教材」としての新聞を活用した取り組み

流山市立常盤松中学校 梅津 潤一

1. はじめに

NIE実践校として2年目を迎え、1年目の活動の柱であった「生徒に新聞を読む機会を与えて、新聞に親しむ」「各教科の授業のどの部分で新聞を活用するとより効果的な学習ができるかを考える」という2点をより充実した取り組みにし、新聞を「生きた教材」として活用することを目標に実践してきた。

2. 実践状況

(1) 新聞閲覧コーナーの設置

昨年度から引き続き、新聞を自由に閲覧できるコーナーを生徒昇降口の正面に配置した。今年度は新聞用のラックを利用し、新聞の一面が目にとまり、興味関心を高めるような工夫をした。また、過去の新聞もラックのそばに配置し、教室に持って行って授業の教材として利用したり、自由に読めるようにしたりした。



(2) 授業資料への新聞活用

各教科担任が教材研究する際に新聞を資料の1つとして活用し、授業を組み立てたり、授業プリントを作成したりした。また、道徳では、授業内容に関わる資料を新聞記事の中から作成し、より

道徳的実践力を高める工夫をした。

(3) 国語科の書評づくりでの新聞活用

書評の中心舞台である新聞の記事を参考にしながら、実際に書評づくりを行った。

(4) 英字新聞と日本の新聞との比較

ALTに協力してもらい、英字新聞を教材として用意した。英字新聞の内容を把握して、日本の新聞との視点や表現の違いを比較する取り組みを行った。

(5) 社会科の授業での活用

教科書で扱われている内容をより深く理解するための資料として活用した。特に公民分野では、政治や経済のしくみなどより深く理解するために活用した。また、時事問題を取り扱う取り組みも行った。

(6) 「朝・帰りの会」の担任の話や学級通信での活用

新聞記事から時事的な話題を取り上げ、話や学級通信等に活用した。

3. 結果

- ・新聞閲覧コーナーの前に立ち止まり、新聞を手にする生徒が昨年度よりも増えた。また、新聞を気軽に手にとり、教室に持ち帰って生徒同士で読む様子も見られた。



- ・道徳授業における活用では、教科書の内容に加えて時事的な内容の記事を活用したことで、題材に対して、生徒がより深く考える様子が見られた。
- ・新聞から得られる情報を元に教材研究を行うことで、より内容の濃い授業づくりに役立ったという声が多かった。また、新聞を資料の1つとして活用することで、授業内容がより深まり、生徒の興味関心が高まった。
- ・書評づくりを通した取り組みが生徒の表現力を高めることにつながった。
- ・英字新聞を初めて目にする生徒が多く意欲を持って課題に取り組むことができた。視点や表現の違いから、文化的な違いに気づくことができた。



- ・社会科の授業の中で新聞を活用することで、生徒が実際に今どのように政治が行われているのか、経済はどのように動いているのか、問題点や課題は何かということをよりはっきりと認識し、理解することができた。

4. 考察

- ・新聞を活用した授業や生徒指導などに取り組んだことで、生徒の新聞に対する興味関心が高まった。教科・領域の授業で取り扱う教科書に加えて、時事的な情報源として、あるいは考え方、表現の仕方を知るための資料として大いに役立っている。
- ・時事的な内容を切り取った記事を使用するだけでなく、新聞そのものから必要な情報を見

つけ出すことで、情報収集能力が向上することが今後期待できる。



5. まとめ

2年間の取り組みを通して、近くにありながら遠い存在だった新聞に対して、より身近なものとして意識されるようになった。新聞から幅広い情報を目にし、活用することで、生徒にも教師にも多くの知識を得る機会を広げることができた。

テレビやインターネットで情報を得ることは非常に便利になっている。しかし、活字を通して、じっくりと記事の内容を読み解くことで思考を深めたり、表現力を養ったりすることに役立てられることを実感した。また、新聞の記事を読むことで必要な情報を収集するための能力向上にも大きな助けとなっている。まさに新聞は「生きた教材」として、教育活動に大いに活かすことができると考えられる。

今後も新聞を生きた教材として、継続して活用するとともに、さらに発展した活動を進めていきたい。



新聞に親しみ興味を高めるN I E活動

神崎町立神崎中学校 磯邊 健

1. はじめに

平成27・28年度N I E実践校として『新聞に親しみ興味を高めるN I E活動』をテーマに、「生きた教材」としての新聞の、様々な場面での活用方法を探ってきた。初年度は学習活動の情報源としての活用に加え、千葉県N I E推進協議会N I Eアドバイザーの助言を受け『はがき新聞』づくりを取り入れ、情報発信手段としての新聞活用にも取り組んだ。

今年度はこれらの実践を継続しながら、新聞各紙面の特徴ある記事や、新聞社関連サイトのワークシートの活用などに取り組んだ。『新聞に親しみ興味を高める』ことを通して、広く社会や事象への関心を高めることが学ぶ意欲につながると考えた。N I E 2年間の実践を紹介する。

2. 実践内容

(1) 新聞や報道についての生徒実態調査から

生徒が社会の情報を得る手段としては、テレビやパソコン、携帯端末が8割強、新聞は2割程度であった。また約3割の家庭では新聞を購読していない実態である。初年度からの、新聞閲覧コーナーや短学活時の新聞記事紹介活動等を通じて、新聞を手にして眺めたり、話題の記事を探すなど、「読む」まではいかないまでも、新聞の見出しや記事への関心を高めている様子が見えた。生徒それぞれ関心あるジャンルの記事に目を向けさせるなど、新聞を身近なものとして継続的に親しませる工夫が求められる。

(2) 新聞閲覧コーナーの設置

新聞に親しむ環境作りとして、各学年フロアに

閲覧コーナーを設け、係生徒が当番活動として新聞各紙の配置・整理を担当した。さらに生徒昇降口特設コーナーに、2日分の新聞1面を掲示し、特に大見出しに注目できるように工夫した。またコラム記事やシリーズ記事などを適宜掲示し、関心が継続するように配慮した。細かい記事内容はともかく、見出しやタイトルから、今関心を向けるべき事柄を知り、社会に関心を高めた生徒も見られた。



(3) 新聞記事の活用

①短学活での記事の紹介活動

短学活時、生徒持ち回りの『1分間スピーチ』として、新聞記事に感想を交えて紹介する活動を行った。



発表に際しては、切り抜いた記事に感想文を添えたスクラップカードを作成させ、学級掲示物としてして積み上げた。開始当初は個人の興味に偏った感のあった記事選択や感想文が、2年間継続する中で、世界や社会全体に関わる問題や中学生に身近な話題など、より社会性の高い話題に移ってきた。一般社会へ関心が広が

り、自分なりの判断を加えた捉え方が見られるようになった。

②教科等での活用

・社会科(公民分野)

「暮らしと民主政治」

民主的な政治の過程として、議会での議論とともに、世論形成のしくみとして新聞各紙の報道記事を比較した。様々な立場からの見解を知り、合意形成の難しさに気づくことができた。また、米国大統領選挙に関連する記事は、民主政治のしくみやメディアの役割を知る「生きた教材」として効果的であった。



・国語科

「読解と表現」 新聞社 N I E サイトのワークシートを適宜活用した。帰宅後の課題として、ワークシートの記事の読み取り、設問への回答を行わせた。説明的な文章や統計資料の読解、要点のまとめ、感想文での表現など、「読み取りから表現」の流れを段階的にコンパクトに練習させることができた。長文の読み取りや文章のまとめが不得手な生徒にもよい課題となった。



・道徳・特別活動

授業に関連するコラム記事や読者の意見投稿を取り入れ、問題意識を高めたり、授業をより印象深くまとめる補助教材として活用した。

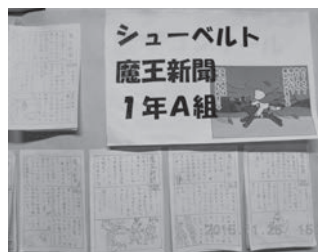
(4) 『はがき新聞』づくりの取り組み

生徒の学習活動のまとめや感想の表現方法として「はがき新聞」を活用した。はがき新聞は「見出し」「本文」と記述形式がほぼ定型で文字数も限られ、生徒には仕上げやすい表現ツールとして

効果的であった。

・音楽科、美術科

音楽鑑賞や美術作品鑑賞での鑑賞文作成にはがき新聞を活用した。限られた時間の中で生徒なりに表現を工夫して、感想を表現することができた。



・特別活動、総合的な学習の時間

進路学習に関わる「上級学校調べ」「職場体験学習まとめ」では、新聞型式(はがき新聞型式)でまとめた。新聞の段組を利用して、内容をジャンル毎にわけて記述したり、写真や図・グラフなどを効果的に取り入れ工夫した表現がみられた。

3. まとめ(今後の課題)

(1) 新聞(記事)に親しませ、良さを感じさせる取り組み

学校で準備し閲覧・活用に供することができる新聞は種類・数量に限られる。閲覧・活用が継続的にできるよう、日常的に活動する組織や仕組みが求められる。また、様々な活用事例など、職員間で情報交換や共有ができるような機会を設定できるとよい。ジャンルを特定した記事の集積など、活用の工夫を進めたい。

(2) 『はがき新聞』の活用

生徒の様々な活動の効果的な表現ツールとして、『はがき新聞』用紙を各サイズ用意し、手軽に利用できる環境を整備する。また作成事例を紹介しあう。

主体的に学び、活動する生徒の育成

～新聞が身近にある環境～

大網白里市立白里中学校 川島 浩美

1. はじめに

本校は「主体的に学び、活動する生徒の育成 ～生徒の学習意欲を高める授業作りを中心として～」という研究主題のもと、研鑽を積んでいる。N I E 実践指定も2年目となり、年間を通し、2～5紙の新聞がある生活にも慣れてきた。生徒は、日頃からテレビやインターネットのあふれかえる情報に翻弄されている。じっくりと新聞を読み比べることで、主体的に物事を考え、自ら学ぶ力を育成できると考えN I E活動に取り組んでいる。



2. 実践報告

(1) 「新聞ラボ」の設置

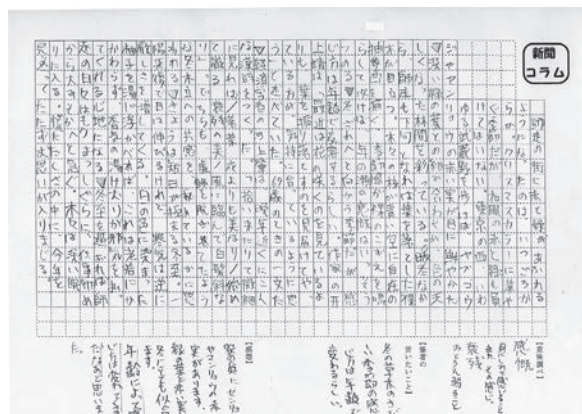
休み時間や放課後に、生徒が新聞を自由に閲覧できるように「新聞ラボ(新聞コーナー)」を設置した。校舎3階図書室前のフリースペースに、読売新聞、朝日新聞、毎日新聞、日本経済新聞、産経新聞、東京新聞、日刊工業新聞、千葉日報等を並べ、1か月分の新聞をストックするコーナーを作り、さかのぼって記事を探すことができるようにした。

各紙の1面を読み比べることで、新聞社ごとの記事の取り上げ方や意見の違い、見出しの工夫に気づくことができた。



(2) 「新聞コラム」の書き写し

情報の収集力、語彙力、文章力、読解力を身につけることを目的に、各新聞社の「コラム」、朝日『天声人語』、毎日『余録』、読売『編集手帳』、千葉日報『忙人寸語』の書き写しを行った。授業で書き方について指導した後、家庭学習として実施した。書き写しだけでなく、わからない語句の意味を調べたり、要旨をまとめたり、記事への感想を書いたりすることで、語彙力や読解力を高められるようにした。記事の内容は時事問題から季節の風物詩と多岐にわたり、生徒自らが選択することもあった。



(3) 新聞読書

11、12月の朝の読書の時間に、3年生は週1日「新聞読書」として新聞を読む期間を設けた。2学級が曜日を変え、5紙7日分の新聞を読んだ。週1回ではあるが、時事問題や社会の動向に気づくことができた。



(4) 授業実践

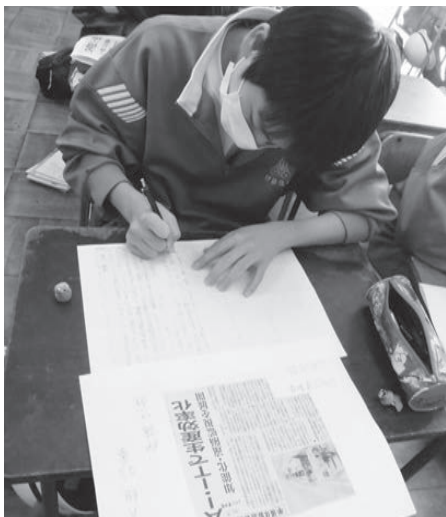
国語科(3学年)

「新聞の社説を読み比べよう

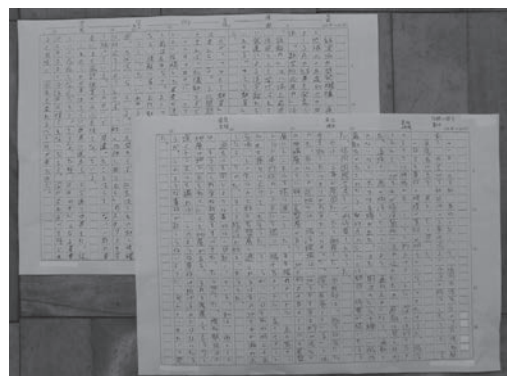
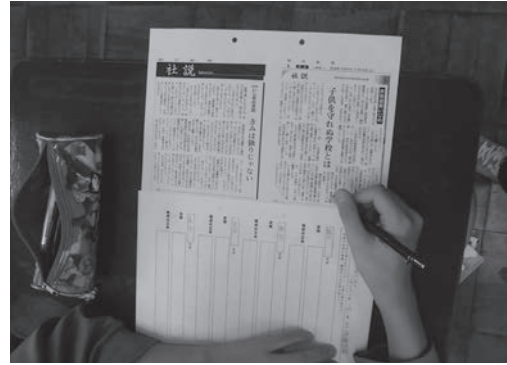
—「級説」を書く」

毎日・朝日・産経・東京新聞の「社説」を読み比べ、意見を書くための構成を学んだ。さらに、自分が気になる新聞記事を選択し、それについての意見文を「級説」として書く学習を行った。

読み比べについては、福島から避難した児童へのいじめ問題を扱った「社説」をテーマとした。



「級説」は、学級を代表する意見文である。アメリカ大統領選挙や介護・福祉、いじめ問題や東京オリンピックなど、一人ひとり興味のある情報を選択し、テーマは多岐にわたった。情報を厳選し、自分の考えを持つという学習に対し、主体的に取り組んだ。



国語科(2学年)

「メディアと上手に付き合うために」

社会の話題やできごとから題材を選び、テレビ、新聞、インターネットによって調べることを通して情報の特徴に気づいた。

国語科(2学年)

「モアイは語る―地球の未来」

自然環境問題に対する論説文を読む学習の発展として、新聞記事をもとにオリジナルの新聞を作る学習を行った。自然・環境をテーマに新聞記事を収集し、テーマごとに新聞を作成して情報交換会を行った。

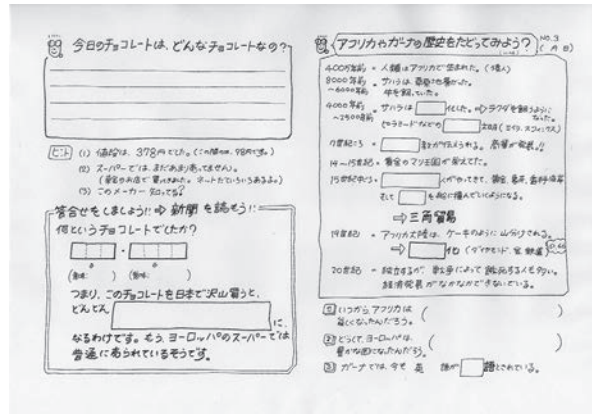


社会科(1学年)

「チョコレートから学ぶアフリカ」

(地理分野)

バレンタインの季節に合わせ、チョコレートの原料・カカオ豆生産国の実情について新聞を資料として学んだ。



3. まとめ

本年度は、常時新聞が身近にある環境づくりに努めた。社会の事象に目を向け、人々の多様な考え方に気づくことで、視野を広げ、世の中の動向に対する意識が高まった。また、新聞を読み比べることで、文章の構成と表現の工夫に気づいた。

新聞によって世界の動向を学ぶことができ、新聞は、読む力を身につける優れた言語教材であると気づくことができた。

新聞記事を活用した取り組みについて

鋸南町立鋸南中学校 島津 裕司

1. はじめに

本校は千葉県南部に位置する安房郡鋸南町の中学校である。本町は、小・中学校ともに1校ずつであり、義務教育9年間を同じ仲間たちで生活している。南房総の温暖な気候のもと、8学級(特別支援学級2を含む)156人の生徒が生活を送っている。

学校教育目標は、「学ぶ意欲を持ち、主体的に生きる生徒」であり、目指す生徒像として「確かな学力を身につけた生徒(賢さ)」「思いやりの心をもつ生徒(やさしさ)」「進んで身体を鍛える生徒(たくましさ)」「正しい判断力と責任感のある生徒(粘り強さ)」を掲げている。また、「生徒を大切にした一人一人を生かす授業の展開～生徒指導の機能を生かした取り組みを通して～」という研究主題のもと教職員は、研修を重ねている。平成27・28年度とNIE実践校の指定を受け、新聞活用に取り組み、実践を行っている。

2. 実践内容

(1) 新聞記事の授業での活用

新聞各紙を教職員全体で共有し、誰でも自由に使用できる体制をとった。各職員の工夫により、様々な活動が行われた。具体的な活動例としては、「同月同日の各紙の一面トップの記事を読み比べる」などのことを実践した。また、朝の会や帰りの会で時事問題を扱うことにより、社会の出来事に対する興味・感心を高める活動も行った。

(2) 学年ごとでの新聞活用

- ①1学年は朝の1分間スピーチに活用して取り組む。

新聞記事の内容を活用し、自分なりの感想や意見を1分間のスピーチをすることで、思考力や表現力を育成する。また全員が新聞の内容を共有することができ、言語活動にも繋がる。

- ②2学年では新聞記事を身近な地域調べ学習に活用する。

日本や世界の地域学習において新聞記事を活用することで、より身近に感じることができるとともに、社会の出来事と学習内容の関係をより深く知ることができる。

- ③3学年は公民の授業での新聞記事の活用である。社会保障や様々な制度、憲法、法律を扱う上で、新聞記事を活用することで、生徒の興味・関心を高める。また、世論を知ることにより、自分の考えを深めることができ、思考力を高める。さらには班活動などを行い、自分たちの意見を発表することによって表現力を高める。

新聞記事の活用により、授業内容をより身近に感じるような発言が目立つようになった。



3. 成果

活動の成果としては、まずは読解力の向上があげられる。新聞記事を定期的を読む活動は、文章から要旨を読み取る力となった。また、新聞記事を授業に活用することによって、自分から必要な情報を得て授業に生かすことができるようになった。当初は記事に対し、感想を書くことが精一杯であった生徒も少なくなかったが、授業と関連づけて新聞を読む生徒が多くなった。授業での発言でも時事問題が話題になり、話が展開することも多くなり、効果が見られた。



生徒は、各社の新聞記事が同一の内容でなく、一つの事柄であっても異なる伝え方や意見があるということや、同じ日であっても新聞記事の内容に異なりがあることに気づき、驚きやおもしろさを感じている。そして、多面的なものの見方・考え方を学習することができた。

4. まとめ

昨年度から取り組んでいるが生徒の思考力・表現力は向上したと感じる。ただ、教職員個人がそれぞれの指導をしていたことは課題に挙げられる。今後は教科横断的な取り組みを図ることにより、より効果的な実践を行いたい。また、教科による新聞記事活用の頻度を上げることも課題である。自分自身の意見を自らの言葉で書くためには

新聞記事の活用が必要になってくる。より生徒が新聞に触れやすくするための取り組みを大切であらう。新聞コーナーを設置することでより新聞に対する親しみが湧き、授業の発言や普段の会話などに生かされていくことが理想的である。

今後もさらに充実したN I E活動を推進していきたいと考える。

新聞記事を活用した「考え・表現する力」の育成

野田市立東部中学校 伊藤 圭哉

1. はじめに

本校は平成28年度が、N I E実践校として1年目である。N I E実践指定校として「自己表現力」の育成に取り組んでいる。本市では平成26年度より土曜授業を行い、生徒の実態に合わせ、工夫を凝らしながら実践を行っている。本校では平成26年度後期から、日常ではなかなか読んだり、考えたりすることができない内容を新聞を活用して、全校で1時間N I E学習に取り組んでいる。

2. 実践内容

(1) 新聞閲覧コーナーの設置

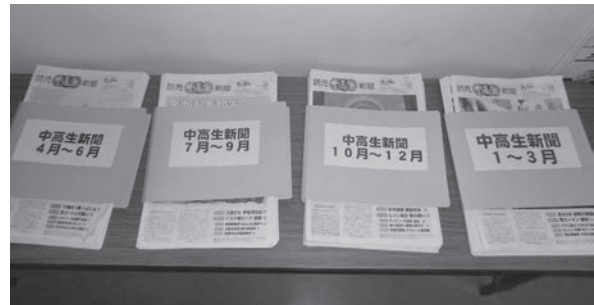
新聞に親しむために新聞を自由に閲覧できるコーナーを各学年の廊下に設置した。毎朝、各学年のN I E係が当番活動として、新聞記事の配置・整理を担当した。この活動によって、朝の登校後の時間や休み時間等に生徒が自由に新聞を読むことができるようにした。また朝読書の際に、新聞記事を読む期間を設け、新聞に慣れ親しませる活動も行っている。

(2) 新聞記事の活用

①土曜授業でのN I E学習

野田市で平成26年度より行われている土曜授業の中で本校では、N I E学習の時間を1時間設定し取り組みを行った。新聞記事を活用した、様々なテーマのワークシートを各学年の発達段階に合わせて作成し、生徒はその中から興味や関心のあるものを選択し、記事を読み、概要をまとめた。また内容に対する自分の考えや意見を書き、それを少人数でディスカッション

し共有することで、新たな考え方や側面に気づくきっかけにもなっている。



②N I E係のDaily NEWSの作成

各学年のN I E係は曜日毎に担当を決め、その日の新聞記事から自分で記事を選択し、自分の言葉で内容をまとめ、記事に対しての自分の考えや意見の記述を行った。完成した原稿は、お昼の放送で紹介し、全校生徒に周知

した。この活動によって、N I E系以外の生徒も毎日ニュースとふれ合うことができ、給食時の話題も Daily NEWS に関しての内容が増えている。



3. まとめ

- ・新聞閲覧コーナーを設置したことにより、新聞が身近な存在となり、手に取って見ようとする生徒が多く見られるようになった。このことは、班新聞や個人新聞を作成する時に、見出しの書き方や、記事の書き方などで良い効果が見られた。
- ・新聞を活用した授業を展開することで、生徒は物事をより身近なことと感ずることができた。また、社会の事象に目を向け、多くの人々が様々な考えや価値観を持っていることに気づき、視野を広げることができた。
- ・新聞記事を定期的に読む活動は、文章から要

旨を読み取る力となった。また、ワークシートを活用した読み取り活動を定期的に繰り返すことにより、ワークシートの問題に対しても、多くの生徒が的確に答えることができるようになった。

- ・一つの事柄に対して複数の記事を掲示し、同じ記事を選んだものを集め、『みんなで読み、意見を述べ合い、考えを深め』その後さらに違う記事を選んだものを集め『意見を述べ合う』N I Eにおけるジグソー学習を取り入れることで一つの事柄に対する考えが広がった。生徒は、新聞記事はどの新聞にも同じ記事が掲載されているのではなく、一つの事柄に対して異なる伝え方や意見があるということや同じ日であっても各新聞によって違う事柄が記事に取り扱われていることに気づき、驚きとともに面白さを感じ、多面的なものの見方・考え方を事例で学習できた。
- ・当初は、記事に対する感想を書くことで精一杯であった生徒も少なくなかったが、やがて多くの生徒は、感想だけでなく自分なりの根拠を明示した上で自分自身の意見を自らの言葉で発表することができるようになってきている。生徒から新聞記事の内容が授業の発言などに自然に出てくるようになれば理想的である。
- ・来年度は道徳に新聞を取り入れる授業作りなど、各教科領域でも新聞を活用した授業展開を模索し、N I Eの幅を広げていきたい。

表現力を高める指導の工夫－新聞の活用を通して－

茂原市立早野中学校 高橋 利子

1. はじめに

本校は、平成28、29年度の2年間、N I E推進の実践校として指定を受け、初年度の取り組みとなる。「主体的に学習に取り組み、豊かな表現力を育成する指導の工夫－学びを深める表現活動を取り入れた学習指導を通して－」を研究主題として、生徒の表現力の向上を目指して、日々の教育活動を行っている。

生徒たちは、素直で学習課題に前向きに取り組むが、自分の考えを積極的に仲間に発信し、豊かな表現で自分の考えを伝えることを、苦手とする生徒も多い。また、新聞のアンケートから、新聞を「ほぼ毎日読む」2%、「週に1～3回」8%、

「月に1～3回」18%、「ほとんど、または全く読まない」72%と、新聞への関心は低い。全国学力・学習状況調査の結果分析からも、普段新聞を読む生徒ほど、テストの正答率が高いことも分かっている。

そこで、今年度は、千葉県N I E推進協議会のN I Eアドバイザーを招いて、教職員の研修を行ったり、また、各教科・領域で、どんな新聞を活用した取り組みができるかを考える中で、次の2つに重点を置いて実践をした。

- ①新聞の閲覧コーナーの工夫を図り、生徒が新聞を閲覧する機会を増やすようにする。
- ②新聞への興味・関心を高める授業づくりを工夫し、自分の意見を書いたり、述べたりする学習を通して、読み取る力や、表現する力の向上を図るための授業づくりの工夫をする。

2. 実践状況

(1) 新聞閲覧コーナーの設置

新聞に親しむために、各階の学年のフロアに新聞コーナーを設けた。「今日の一面 Watching!」として新聞4社の今日の一面トップ記事を毎日掲示し、一面記事の読み比べができるようにした。新聞のラックの取り替えは、学習委員会の活動として毎日行い、生徒たちが日常的に新聞を手にして自由に閲覧できるようにした。また、今日の一面の横に、「イチ押し! NEWS ペーパー」のコーナーを設け、学習委員のおすすめ記事や、「〇〇先生のイチ押し!」などの記事を掲示した。



(2) 読売ワークシート通信の活用

朝の読書の時間に、毎週一日だけ(金曜日)「新聞タイム」を設け、読売ワークシート通信に取り組み活動を行った。読売ワークシート通信は、読売新聞などの記事の抜粋に、問題と解答記入欄がついたワークシート教材である。週1回メール送信され、最新の時事的な話を扱っており、手軽に活用できるところが魅力である。次の手順で取り組んだ。

- ①記事を読み取り、印象に残ったところに線を引き、問題に取り組む。
- ②記事への感想や自分の意見を書く。
- ③ワークシートは担任が確認した後に、生徒個人の総合ファイルに綴じたり、掲示したりして、お互いの意見を共有できるようにした。

読売ワークシート通信を活用することによって、読解力をつけることだけでなく、記事の内容をまとめたり、自分の意見や感想を書いたりすることができ、思考力や表現力を育成することにつながったのではないかと考える。身近でタイムリーな話題や、生徒が興味関心を持ちやすいものを選択しているが、道徳的な内容や、考えさせたい社会問題についても選択している。

(3) 「スクラップ新聞」や「まわしよみ新聞」作り

保健体育科の授業では、リオデジャネイロオリンピックをテーマに、個人でのスクラップ新聞作りを行った。2016年は4年に一度の「オリンピックイヤー」というチャンスであり、夏休み中に、リオ・オリンピックの新聞を集めさせておいた。そして、そこから、気になる記事、心に残った記事を切り抜きシートに貼り付け、スクラップ新聞を作った。新聞をとっていない生徒には、教師が集めたものから見つけさせた。気をつけさせたこ

とは、①新聞の日付・新聞社名を必ず明記する②記事を読んで気になる部分や注目する部分に、蛍光ペンで線を引く③記事を選んだ理由や読んだ感想を文章で書くなどである。



りオでの熱い戦いが、たくさん報道され盛り上がっていたので、生徒たちの関心も高く、意欲的に取り組むことができた。

また、総合的な学習の時間に、グループで関心のある記事を選んで画用紙に貼り付ける「まわしよみ新聞」作りを実践した。4名ずつのグループに分かれ、それぞれが選んだ記事について活発にディスカッションしながら、切り抜いた記事を、画用紙にレイアウトよく貼り付け、見出しや自分の意見、記事に対する感想や挿し絵を入れて、自分たちなりに「一面」を完成させた。初めての経験で、新聞を読み慣れていない生徒も多く、個人の切り抜く新聞を探すのに時間がかかってしまった。

このような「まわしよみ新聞」作りは、一人一人に発言の機会があり、短時間でも新聞活用を積み重ねれば、社会に目が向いていく。これからも授業に取り入れることができ、教育現場の様々なシーンでの学びあいに活用できるのではないか。

最後に、グループごとの発表を行ったが、このプレゼンテーションは、これからまだまだ訓練していかなければならない課題である。生徒たちは「今まで新聞を読むことはほとんどなかったが、良い機会を与えてくれた。」と、楽しく活動する姿が見られた。新聞を読み、友達と交流し、意見を出し合いながら協力して作品を完成させる喜びを味わうことができたのではないか。



3. まとめ(成果と課題)

- ・学校生活のあらゆる場面で新聞を使った取り組みができ、多少なりとも、新聞が学校生活の中で身近になってきている。
- ・新聞閲覧コーナーを設置し、新聞を読む機会を設けたことで、新聞が身近な存在となり、休み時間に新聞を手取る生徒が徐々に増えた。
- ・読売ワークシート通信の活用により、短い時間で文章の要点や必要な情報を読み取り自分の意見を簡潔に表現できる生徒が増えてきた。
- ・「スクラップ新聞」や「まわしよみ新聞」作

りなど、新聞を活用する授業を通して、生徒は社会の出来事に目を向けることができた。様々な考えや価値観、さらにその背景を知ることで、社会に対する関心を深めることができた。そして、自分の考えを言葉で表現し、伝え合い、他の人の考えを知るという表現する楽しさを体感できたのではないか。

- ・新聞は情報の宝庫である。様々なことを学ぶことができる場である。新聞記事は、生徒たちの心にストレートに響く。そのねらいにあう記事を見つけるためにも、日頃から教師自身が楽しく新聞と接して考えていくことが必要である。新聞は、まさにAL(アクティブ・ラーニング)の教材である。
- ・新聞活用を各教科・領域の年間計画の中に組み込み、計画的に実践していく必要がある。また、色々な教科で、新聞を活用しての授業の取り組みをしていきたい。

“新聞”に慣れ親しむための取り組み

南房総市立富浦中学校 入野 祐一

1. はじめに

本校は、千葉県南部の南房総市にある中学校である。温暖な気候で風光明媚な自然に囲まれたこの学校では、現在126名(5学級)の生徒たちが学校生活を送っている。

本校の教育目標は「志を立てて 文武両道に励み 豊かな心を持った生徒の育成」である。そしてこの目標を達成するために、「確かな学力」「豊かな心」「健やかな体」をバランスよく育成することが求められている。今年度の校内研究テーマは「一人ひとりの確かな学力の向上を目指した指導方法の工夫 ～規律ある授業づくりを通して～」であり、若手教員の指導技術向上に重きを置いた取り組みを進めている。

今年度、NIE実践校としての指定を受け、研修部を中心に社会科教員の協力のもと実践を行ってきた。

2. 実践状況

(1) 新聞コーナーの設置

1階職員室前の廊下に新聞コーナーを設け、生徒が自由に新聞を閲覧できる環境を整えた。主要全国紙に加え、地方紙や英字新聞、また新聞を読み慣れていない生徒のために、小学生向けの「こども新聞」も配置した。



生徒の中にはコーナーを通る際に足を止めて友達と新聞記事を見合ったり、後述する短学活での記事紹介のために何か面白い話題はないかと探したりする姿が見られた。

(2) 短学活での「今日のニュース」紹介

毎朝15分の短学活の中に、「今日のニュース」と称する項目を設け、日直(あるいは各学級で決められた担当生徒)が、自ら選んだ新聞記事をひとつクラスで紹介するという取り組みである。紹介は、「見出し→内容→感想・意見」という流れで行われる。特に内容の紹介については、どの生徒も当初記事に書かれているそれを一字一句すべて読み上げる者が多かったが、2巡目以降慣れてくると要旨のみをまとめて伝えることができるようになっていた。また感想・意見については、単に「おもしろかった」などにならないように、「○○なので、すごいと思った」「○○という点で興味深かった」などと理由や具体的な面に触れて述べさせるように心がけた。

生徒にとっては、人前で発表(スピーチ)する経験そのものに乏しい者も多く、まして自分で記事を取り上げてそれに対する感想や意見を述べるということに抵抗を感じている生徒が多かった。しかし繰り返しているうちに、生徒も自信をもって記事を発表することができるようになり、聞く側も興味をもって耳を傾けている様子が印象的であった。やはり生徒にとっては地元地域への関心が高く、地元紙の話題を取り上げる生徒が多かった。

なお、生徒が発表した記事についてはコピーを掲示したりスクラップブックにとじたりして、誰

がどんな発表をしたのかふり返って見ることができ
るようにした。

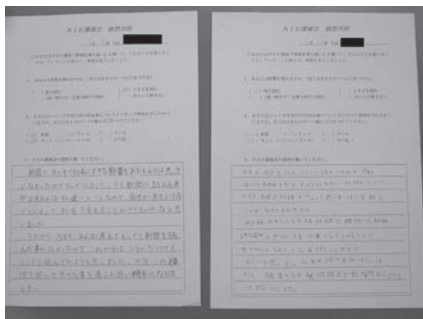


(3) 地元新聞社記者による講演会

地元紙「房日新聞」の現役新聞記者の方をお迎
えして、全校生徒を対象とした講演会を行った。



「新聞記事の違い」という主題で、同一の記事
でも、新聞社によってコラムなどの書かれ方に差
異があることなどを解説していただいた。生徒の
感想から、ネットの普及により手軽に情報が手
に入るようになってきている中で、きめ細かい取材や調
査により正確な情報が掲載されている新聞の重要
性に気付いたという意見が多かった。また、新聞
の投書から企業や自治体の体制が変わった事例に
ついて紹介があり、新聞の社会における役割の
新たな一側面について知る機会となった。



事前アンケートではふだん新聞を欠かさず読ん
でいる生徒は少ないという結果であったが、この
講演会を機にもっと新聞に目を通す機会を増やし
たいという生徒が多かった。

3. 結果

アンケートの結果から、本校生徒の新聞を読む
ことに対する意識は全体的に向上した。学校生活
のあらゆる場面で新聞に触れる機会が多くなった
ことで、新聞がより身近な存在として生徒の間に
根付くこととなった。また、国語科で授業を通し
て新聞記事のコラムを作成する活動を行うなど、
指導する教員側にもより生徒たちの学びに新聞を
位置づけようとする意識が芽生えた。

4. 考察

今回の取り組みを通して、生徒に新聞に対する
親しみを持たせるという目標はおおむね達成でき
たと考えられる。ただ、生徒の中には「新聞をゆっ
くり読む時間がない」という意見を持つ者もおり、
今後はさらに活動を発展させて、学級活動や
道徳の時間を活用した取り組みについても研究を
重ねていきたい。また、指導する側もNIEに対
する適切な知識や指導技術を身に付けていく必要
がある。校内研修で積極的に扱っていくことで、
より効果的なNIEの実践について見識を深めて
いけるようにしたい。

5. まとめ

今年度はNIE実践初年度ということで、実践
も“新聞に親しむ”ことを意識した内容のものが
多かった。来年度は今年度の実践内容も踏まえ
て、“新聞から(新聞を通して)学ぶ”ことを中心
に据えていく必要がある。そのためには学年や教
科、校務分掌の枠を超えて学校全体で取り組む活
動にしていかななくてはならない。今後もより充実
したNIE活動を目指して日々研究を重ねていく
所存である。

「活用」の場面を工夫したN I E教育

千葉市立打瀬中学校 石井 美佳

1. はじめに

本校の研究主題『学習意欲を向上させるための指導法の工夫 ～「活用」の場面を工夫した授業実践を通して～』を実践して、3年目にあたる。本校では、「既習の知識・技能を用いて新たな課題を解決すること」を「活用」と定義し、生徒がこれからの社会で必要とされる課題を解決していく力を身につけていくためには、学習活動において「活用」の場面を取り入れ、積極的にその積み重ねを進めていくことが必要であると考えた。

そこで、N I Eの実践指定校の1年目として、「活用」の場面で、新聞を有効に活用した授業実践が各教科で行われるようにした。

2. 実践状況

(1) 教科ゾーンに新聞掲示

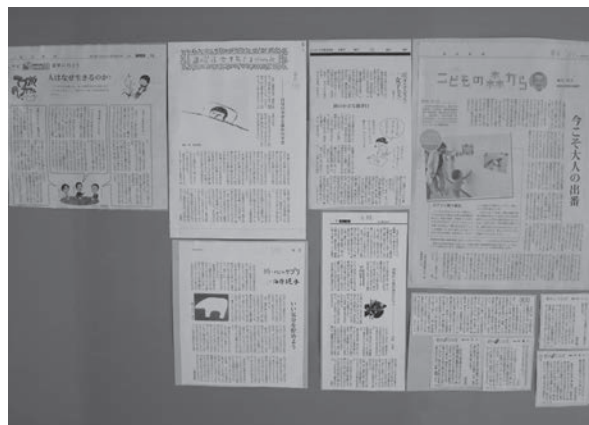
本校は、教科ごとに生徒が教室を移動する教科センター方式を実施している。そのため、各教科ゾーンで、各教科に関係する記事を掲示し、生徒に興味関心をもたせられるように工夫した。



【国語科の新聞コーナー】



【美術科の新聞コーナー】



【カウンセリングルーム前の新聞コーナー】

(2) 授業実践

①国語科

国語科では、大岡信の「言葉の力」の読み取りの発展として新聞を活用した授業を行った。

筆者は、「単独に美しい、正しいと決まっている言葉はない。言葉の本質は、口先だけや語彙だけのものではなく、それを発した人間全体の世界を背負ってしまうところにあるからだ。人間全体がささやかな言葉の一つ一つに反映してしまうからだ。」と述べる。このことから、言葉に力をもたせるためには、目には見えない人の心や人生の生き様、態度が大切になると考えた。そこで、抽象的な筆者の述べる「言

葉の力」を目に見えるように具体的な形で表出したいと考えた。その手立てとして新聞を使った取組を行った。

「心に響く言葉を集める」というテーマを与え、数か月分の数社の新聞を読み込み、付箋などで新聞に印を付け、コピーリクエスト用紙に、月日、朝夕刊、何面、見出しを記入させた。そして、生徒が書いたコピーリクエスト用紙から教師が新聞をコピーし、生徒に記事を収集させた。その後、生徒は、必要な部分の記事を切り取って模造紙に貼ってまとめた。

そのようにして収集した心に響く言葉が、生徒自身の言葉の花びらであり、ささやかな言葉そのものだと考えた。また、心に響く言葉を探すというテーマだけを与えたにもかかわらず、収集した言葉にはある方向性を見出すことができた。自分自身が無意識に大切にしている志向があることに気づくことができた。その普段意識していない言葉の志向そのものが自らの「言葉の力」であることに気づくことができる機会となった。

さらに、記事をまとめた模造紙を実物投影機で映し出しながら学級のみみんなに向かって発表した。普段の姿からは見えない友達が大切にしている思い(「言葉の力」)を知ることでできるよい機会となった。



【「言葉の力」の学習】

②社会科

社会科では、3年公民的分野の人権学習において、ハンセン病について記載された新聞記事から、ハンセン病問題とは何か、その原因や解決策等について読み取り、考え、話し合いをさせた。実際に世の中で起きている問題だけに、生徒の関心は高まった。このように、教科書で学んだ人権が実際の生活や社会の出来事を理解するのに役立つといった有用感を得ることができれば、社会科学習に対する興味・関心が高まり、次の学習への動機付けとなることがわかった。また、全学年共通で、授業の始めに一人ずつ、新聞記事に関して、その内容を要約し、自分の考えを述べる「3分間スピーチ」を行っている。聞き手も毎回記録をとり、そのニュースに対して自分の考えを書いている。この取組は、社会的事象に興味関心を持たせるだけでなく、言語活動の充実を図る実践になっている。



【社会科の人権学習】

③美術科

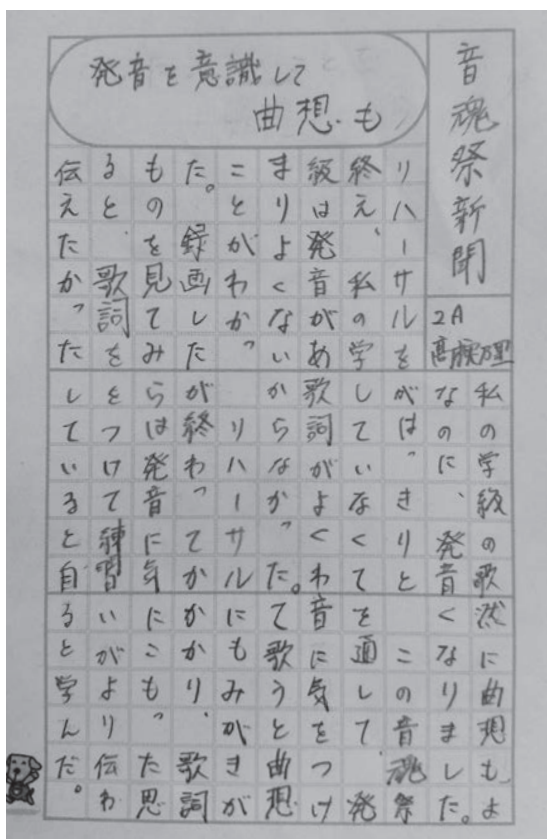
活用していく基礎的知識、技能の習得を重視した題材配列を行った。また、「美術は生活に役立つ」ことを知り、生涯にわたって美術を愛好する心情を育てて行くことを目指した。さらに、今年度はN I Eを取り入れた授業展開を幾つか導入し、この題材では新聞のテレビ欄の色に注目させ、色の印象(イメージ)について考

える資料として使用した。入学当初から、色の三要素や色相環について学習を行い、効果的な配色計画で作品を制作し、色というものが生活の中で、様々な表現ができることに気づき、実感できるための取組を行った。

④音楽科

合唱コンクールのまとめを、ミニ新聞にし、楽曲にふさわしい歌い方を確認した。

その後、当日ゲスト出演した幕張総合高等学校合唱部の演奏をあらためて鑑賞し、多くの表現のポイントを確認できた。今回の学習内容を振り返り、より良い合唱につなげていけると感じた。



【音楽科のミニ新聞】

3. 成果と課題

(1) 成果

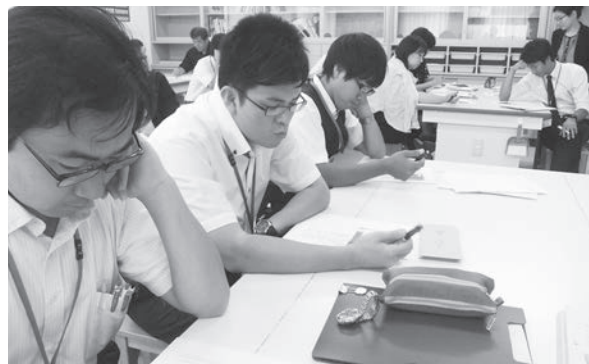
実践指定校に認定され、各教科において新聞を活用した授業実践を行った。8月の研修において

千葉県NIE推進協議会のNIEアドバイザーを招き、NIEについての講習を全職員で受けた。それによって、NIEについてのイメージができ、授業実践していく素地を作り上げることができた。

そして、9月から毎月3紙以上の新聞が届き、生徒の目に触れられるように新聞コーナーを設けた。

また、本校の特色である教科センター方式を活用して各教科ゾーンに関連する記事を掲示した。また、授業において新聞を活用することにより、生徒たちの考えや理解をさらに深めさせる手立てとして有効に使われた。

さらに、各種会議において、時宜にあった新聞記事を配付することによって諸問題を解決する糸口として利用した。



【8月のNIE研修】

本校の生徒は新聞を読み慣れない生徒が多いので、少しずつ読む習慣を身につけさせるように工夫した。

新聞を活用した授業を通して生徒は以下のような感想をもった。「新聞には自分を強くしてくれる言葉があって感謝したい。自分の心と向き合うことができよかった。元気づけられるような言葉がたくさんあり、教訓になった。心に響くとずっとその言葉が残っているような気になった。人の物事に対する考え方や姿勢がわかった。新聞が生活や考え方の中に生かされるということを実感し

たのでよかった。新聞の記事は自分の気持ちが変わるので、これから読んでいきたいなと思った。自分でも気づいていなかった本当の自分がわかった気がした。新聞を取るようになった。」

新聞は、事件・事故などを知るためだけのものではなく、言葉に出会う機会になったり、世の中のことがわかるようになったり、生き方考え方を考えることができたりするツールであることも実感することができた。新聞の新たな魅力を知ること、生活に役立たせていきたい。

(2) 課題

中教審の次期学習指導要領の答申のまとめでは、「読解力向上」を喫緊の課題と位置づけた。文章を的確に理解し、自分の考えの形成に生かす力の育成を強く訴えている。また、討論や発表を重視した「アクティブ・ラーニング」の授業では、新聞や統計資料などを教材として一層活用すべきだとしている。今後もNIEを活用していくことにより、読解力向上につなげていきたい。

進学講習における新聞活用

千葉県立佐原高等学校 石毛 一郎

1. はじめに

昨年までと同様に実践を重ねた。①地理の授業において「NIEタイム」を設定した。授業の冒頭の5分間で、教科書の内容との関連を考えさせながら紙面を読ませた。②朝日新聞による「スクラップコンクール」や東京新聞による「切り抜き作品コンクール」に参加した。地理の授業の課題の一つとして、生徒が自主的に取り組んだ。③地理の授業の「身近な地域の調査学習」の単元において地元紙面を活用した。千葉日報や茨城新聞(本校生徒の30%が茨城県民である)を利用した。

これらに加えて、今年度は新たに進学補習においてNIEを導入した。

2. 進学講習「時事問題」における新聞活用

本校では、始業前や放課後に進学講座を設定している。平成28年度は、3年生を対象に国語(2) 数学(1) 英語(4) 社会(7) 理科(5) の各講座が、2年生を対象に国語(3) 数学(2) 英語(4) 社会(4) 理科(2) の各講座が、1年生を対象に国語(2) 数学(3) 英語(3) の各講座が開かれている。その中で、2年生を対象に「時事問題」を設定して新聞活用を試みた。

進学講習の1つとして「時事問題」を設定した。筆者が所属する2学年生徒を対象とした。この講座を設定した理由は、新聞記事を通して社会の出来事に関心を持ってほしいと考えたからである。本校では、ほとんどの生徒が大学へ進学する。例年3年生の多くが小論文や面接の練習に取り組むが、日ごろから読書や新聞を読む習慣が少ないため、時事的な話題をあまり知らない生徒がほとん

どである。受験の本番を迎えてから時事問題を学習するのではなく、日常的にアンテナを高くはる訓練を早くから始めさせたいと考えた。



内容としては、①読売ワークシート通信、②朝日 Teachers' メール(新聞記事・天声人語ワークシート)、③担当者が選んだ新聞記事などを利用した。量的には、1週間に5枚を目安とし計100枚をゴールに設定した。進め方として、各自にA4の2穴ファイルを用意させ、毎週月曜日に提出されたものに担当者が簡単なコメントを書き、次の5枚を綴じて返却する。担当者は、筆者のほかに保健体育科の教員や図書館の司書教員に協力を依頼した。時事問題というと、社会科が担当するイメージが強いようだが、NIEの実践が「担任」を通して広まったり、「教諭以外の職員」の理解を得ながら普及したりする可能性を広げたいと考えた。

受講生は約30名だった。当初こそ皆が締め切りを守って提出したが、次第に滞る生徒も多くなった。担当者から声をかけることもあったが、それでも反応がない生徒へは、担任を通してそれまでの分を渡してもらった。まったくやらず提出

できない者もいれば、ワークシートの記事は読んだが設問をやっていないとか、答えが書けないなどの理由で提出を見送っている者もみられた。毎回英字新聞のワークシートを1枚ずつ混ぜたので、英語が苦手な生徒は時間がかかってしまったようだった。

通常の進学講習と異なり、定められた時間に集まるのではなく、中央廊下に設置した専用の机への提出と返却を繰り返した。担当者から生徒への呼びかけは、プリントを10枚提出する毎に「手紙」を通して伝えた。例えば筆者からは「新聞を読む習慣の大切さ」を、保健体育科の担当者からは「紙面に紹介された『手洗いのすすめ』」を、図書館の担当者からは「18歳選挙権と新聞の関係」などを伝えた。異なる教科や職種の担当者からの「手紙」は生徒からは好評なようだった。

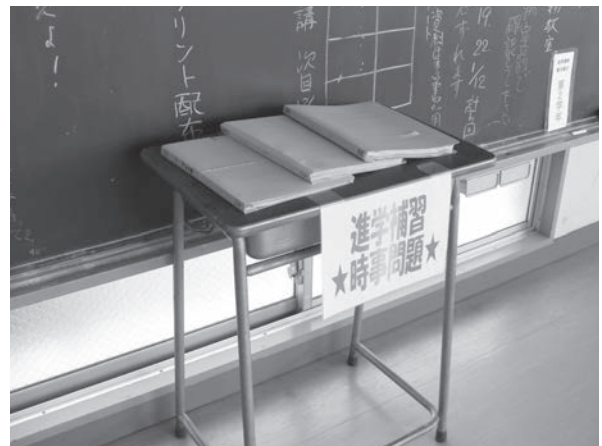
一方で、徐々に提出しなくなる生徒も出てくる。「プリントの設問は解けなくてもいいから記事だけでも読んでみよう」と呼びかけ、あまりためずに次にプリントを渡すようにした。何もしないよりは、紙面に目を通すだけでも大きな成果が得られると考えた。それでも未提出が続く生徒とは面接を行った。提出しない生徒の多くは「他の課題に追われて手が回らない」「サボってしまいたまってしまった」と答えた。中には「全てが完全に終わらないと提出できない」という完璧主義の生徒もいるので、事前にルールを確認しておく必要も感じている。

3. おわりに

1年間の取り組みを通して、担当以外の教員も興味を示してくれた。「配布されたプリントがほしい」「ホームルームや総合的な学習の時間にもやらせたい」などのリクエストや、「一般の生徒も手に取れるように中央廊下に配布コーナーを

作ってみては？」などのアイデアも寄せられた。この取り組みが該当生徒や担当教員の他にも校内で認知されたことも大きな収穫だった。

高等学校は学校間における学力差が大きく、進学者の多い学校から就職する生徒が多くを占める学校まで、NIEの活用方法も様々である。本校のような進学校では、想像以上に時間的制約が大きく、新聞を自由に活用できる時間はとても限られている。受験でも必要とされる小論文や面接の練習や学習の教材としての新聞活用を、今後も展開していきたい。



工業高校におけるN I Eの活用

千葉県立東総工業高等学校 高旨 清仁

1. はじめに

本校は昭和38年に創立し、地域産業に貢献する有為な人材の育成の場と東総地域の工業開発促進施策の一環として地域住民、産業界の期待を担って実践的な技術・技能や望ましい職業観・勤労観をもつ国内外で活躍する工業人の育成に努めている。学科は、電子機械科・電気科・情報技術科・建設科の4学科を設置し、「ものづくり」に係る工業技術や資格を身につけることができる。

本年度はN I E実践指定を受け、2年目となり、昨年度から継続している「工業高校におけるN I Eの活用」を主題として、建設科の2年生(40名)を対象に4班に分け、グループ学習として授業で新聞を活用した。

2. 実践状況

工業教育とN I Eの関わりとして、工業分野(建設)の記事から「新聞スクラップ」を行い、「新聞切り抜き作品」を作成するとともに、工業分野(建設)の今日的課題や地域社会の現状などをまとめ、発表することで、言語活動と体験活動の充実を図ることを目的とした。



(1)「新聞切り抜き作品」

(建設科2年生で実施)

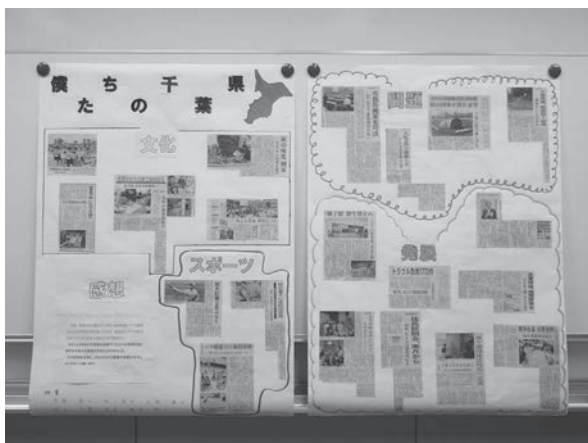
建設科2年生の「新聞切り抜き作品」では

- 1班 『豊洲・盛土大丈夫?』
- 2班 『豊洲市場移転計画延期!? 環境問題の影響か?』
- 3班 『豊洲市場問題』
- 4班 『僕たちの千葉県』

の4作品を作成し、N I E発表会としてスライド作成やプレゼンテーションを実践した。

新聞切り抜き作品





3. 生徒の変容

NIEの取組を終え、生徒たちは教室内や日常会話の中で、新聞記事の内容を話すことが多くなり、同一の情報を共有することで自然とコミュニケーション能力が向上したと感じた。また、生徒たちが身のまわりで起きていることに興味・関心を持ち、その内容を的確にとらえようとする、心の成長を垣間見ることもできた。

4. まとめ

今回のNIE実践では、一つのテーマについて複数の生徒で協力して作品を作り上げるグループワークにおいて、自ら課題を発見し、解決に向けて話し合い・意見交換・討論など協働的に取り組む姿勢が見られた。教科指導においては、新聞記事と科目との関連を持たせたことにより、今まで以上に積極的に学習に参加し、学習意欲の向上や

学習習慣の定着につながったと感じる。また、この学習活動を通し、生徒の興味・関心、問題発見力、情報活用力、探求心、社会への提案力が向上したと実感する。

「新聞切り抜き作品」の作成では、レイアウトや見出し、関連記事の収集など積極的に活動することができた。また、工業(建設)だけに限定して「新聞切り抜き作品」を作成することで、普段の学習内容と建設分野を取り巻く環境や社会情勢、先進的工業技術などが相互に関わり、生徒の興味・関心を刺激し、主体的学習に繋がっていったように感じ取れた。

今後の展望としては、建設科だけでなく、共通教科を含めた複数の科目の授業とも連携を図りながら新聞を活用したり、読書活動の一環として朝学習の教材として利用したりしていくことが考えられる。また、進学や就職時の面接試験等に対応できる知識をバランスよく得られることなどから、NIEは進路指導教材としても大変有効である。学習指導、進路指導の一環として多くの先生方にNIEの活用を期待するとともに、今後も工業教育とNIEの活用を通じて、将来の工業技術者として社会的・職業的に自立した地域を支える人材の育成に携わっていきたい。

多くの社会問題に関心を持とう！

～N I E活動を通じた取り組み～

専修大学松戸高等学校 山口 恵子・上村 竜一

1. はじめに

専修大学松戸高等学校は、千葉県松戸市にある男女共学の私立学校である。「報恩奉仕」「質実剛健」「誠実力行」を建学の精神としており、学業だけではなく、課外活動や地域交流等を通じて、国際社会で活躍できるリーダーの育成に取り組んでいる。

本校は、今年度よりN I E実践指定校となった。今年度は、①世の中で起きている多くの社会問題に関心を持つこと、②多面的・多角的な視点から問題を考察すること、③他者との対話を通じて自分の意見を表現できる力を養うことを目標として、主に公民科の授業を中心としてN I E活動に取り組んだ。

2. 実践内容と成果

(1) N I Eコーナーの設置

休み時間や放課後に、新聞を閲覧できるように、中央館と南館を結ぶ渡り廊下のスペースに、「N I Eコーナー」を設置した。その日の各新聞社のトップページの違いがわかるように配置した。

(2) 新聞記事を用いたレポート作成

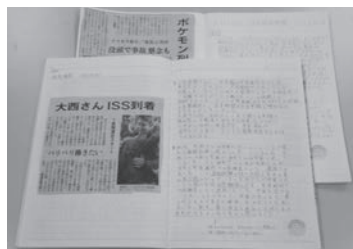
新聞記事を用いたレポート作成の取り組みは、以前より高校1年生の現代社会の授業の一環として取り組んできた。長期休暇中の課題として、年3回(ゴールデンウィーク、夏期休業中、入試期間中の自宅研修期間中)作成している。

内容は、自分自身が気になる記事を1つ選び(夏期休業中については3つ選ぶ)、記事の要約と、記事に対する自分の考え(200字以上)を述べる

というものである。

(3) 新聞ノートの作成

高校1年生の現代社会の授業で取り組んできた、新聞を用いたレポート作成をリニューアルする形で、年間を通して新聞ノートの作成に取り組んだ。対象としたクラスは、高校3年生の専修大学クラス(専修大学付属推薦制度を利用して専修大学へ進学を希望するクラス)と、S類型(スポーツ推薦クラス)である。専修大学付属推薦入試は、作文試験が必須となる。学部ごとに出題内容も異なるため、文章を書く訓練をするとともに、世の中の問題に対して幅広く関心を持ち、自分の意見を表現する練習を兼ねて実施した。



新聞ノートには、以下の内容をまとめることとした。

1. N I Eコーナーに設置し終えた新聞を活用し、自分が気になった新聞記事を切り抜く。(記事のジャンルについては、特に制限を設けなかった。)
2. ノート見開きを1回分とし、ノートの左側に新聞記事を添付し、ノートの右側には、
①記事の要約(100字程度) ②記事の疑問点とそれについて調べたこと(わからない用語も含む) ③記事に対する自分の考え(200字以上)をまとめた。

2週間に1回の割合で、授業の時間を活用して取り組んだ。回数を重ねることで作成にも慣れ、手際よく取り組むことができた。また、選択する記事の内容に制限を設けなかったことで、教師側が、生徒の興味関心分野を幅広く知ることができたのも良かった。

(4) 朝読書の時間を利用したグループディスカッション

本校は、X類型(専修大学松戸中学校からの内部進学者)とE類型(特進クラス)に、朝読書の時間を設けている。その時間を活用し、今年度はE類型高校1年生の2クラスを対象として、週1回新聞記事を活用したグループディスカッションを行った。

ディスカッションの題材として使う記事は生徒自身が選び、ディスカッションの運営も生徒主体で取り組んだ。



(5) N I E活動報告会の実施

(4)で述べた内容を踏まえ、1年間取り組んできた成果を発表するため、年度末に「N I E活動報告会」を行った。

この報告会では、「新聞を通して未来を考える」をテーマとし、これまでのグループディスカッションで取り上げた新聞記事から1つ選び、今後の未来予測をそれぞれのグループが考え発表した。

生徒たちは、北朝鮮問題、長時間労働、イギリスのEU離脱、男女格差など多岐に渡る題材を取り上げており、その関心の深さを示す内容となった。

この活動を通じて、生徒は多面的・多角的な視

点でものを見る力、自分の考えを表現する力、他者の考えを理解する力を養うことができた。

※N I E活動報告会については、2017年3月26日(日)朝日新聞朝刊で紹介して頂いた。

(6) 読売新聞気流欄「N I E投書編」への投稿
読売新聞社よりお声がけいただき、投書面気流欄「N I E投書編」への投稿の機会を頂いた。読売新聞のN I E投書編は、2011年4月より毎月1回(最終土曜日)に掲載されている。このお話しを受け、学年共通課題として取り組んだ。

生徒は、テーマである「路上ライブ 騒音にも」(2016年12月22日 読売新聞朝刊気流欄)の投書と関連記事を読み、肯定的か否定的かのいずれかの立場で投書を作成した。

生徒にとって身近に感じられるテーマであったため、自身の実体験を盛り込みながらそれぞれの立場で意見を述べることができた。

※本校生徒の投書は、2017年4月29日(土)読売新聞朝刊の気流欄に掲載された。

3. まとめ

今年度よりN I E実践指定校としての活動が始まった。初年度は、新聞を通じて世の中で発生している様々な社会問題に目を向けることを重点的に取り組んだ。活動内容については、それぞれのクラスで異なる取り組みをしているが、クラスの持つ特性を活かすことができたのではないかと考えている。

次年度も、今年度の実践を継続しながらも、教科横断的な取り組みや、外部の協力を仰ぎながら、より深みのある活動ができるよう工夫していきたい。

病弱教育特別支援学校における新聞活用

千葉県立四街道特別支援学校 小関川 洋美

1 はじめに

昨年度より県内の特別支援学校として初めてN I E実践指定を受け、研究を行った。昨年度は高等部の生徒を中心に新聞活用を推進してきた。多くの生徒が新聞を活用して、情報交換等のコミュニケーションをはかったり、自分の意見を伝えるきっかけにしたりすることができた。

一方で、高等部棟にN I Eコーナーを設置しているため、他学部(小・中学部)に活動が浸透していないという課題があった。しかし、校内では小学部・中学部でも新聞活用がなされていた。そこで、今年度は全校で行っている新聞活用について紹介し、様々な取り組みを知る機会にすることとした。

また、本校には病院に入院しながらベッドサイドやW e bを通して学習をつづけている生徒が在籍している。それらの生徒に対する新聞活用についての実践や心理的に強い不安を持つ生徒による新聞活用も紹介する。

2. 実践状況

A N I Eコーナーの設置

今年度は高等部棟の廊下と、校長室前にコーナーを設けた。高等部のコーナーは昨年と同様教師主導でコーナーを設置した。日々の新聞の整理については、昨年度から引き続き、3年生の1クラスを中心に運営した。車椅子利用の生徒でも手に取りやすい位置に新聞ボックスを設置し、誰でも気軽に新聞を読めるようにした。一週間に一度、月に一度、教師からの記事を紹介コーナーも継続して設置した。

校長室前のコーナーには全学部の取り組みや文化祭の時期の前後に障害者スポーツを紹介する記事を掲示した。実際に小学部が新聞活用で使用しているツールも掲示した。

B 新聞記事紹介、意見交換

①高等部3年生 帰りのホームルーム

前年度から継続して毎日の帰りのホームルームで「今日のニュース」の時間を設け、その日の新聞記事や、新聞で読んでから気になって調べたものをクラスメイトに紹介し、感想を述べ合った。

②社会科(現代社会、地理、倫理)

教室で行う授業の開始時に、学習範囲に関連した内容の記事を取り上げ紹介した。複数の新聞があるときは、その記事の取り扱い方の違いについて生徒達と話し合った。

また、病院に入院しながらビデオ通話を活用して行う遠隔授業では、生徒自ら新聞を活用した時事問題の学習を希望した。そのため、新聞の切り抜きをコピーしたものを病棟に担任が持って行き、学校にいる授業者が新聞を持って授業を行った。

C スクラップファイルの作成

①前年度から継続して「高等部3年生の帰りのホームルーム」で紹介するために、生徒が事前に気になる記事をスクラップシートに貼り、一言感想を書いておくようにした。発表後、教師やその他の生徒の感想も含めて記入して、ファイルに閉じてN I Eコーナーに掲示した。

3. 結果

A 「N I Eコーナーの設置」について

前年度に続き、多くの教師が毎日新聞コーナーに立ち寄り、新聞を読んでいる様子が見られた。新聞の到着を待つ教師もおり、新聞を持ってくる係の生徒の励みとなっていた。その結果、新聞がよりいっそう身近なものになったようであった。

また、他学部の活動を紹介することで「小学生のうちから新聞を読もうとしているのはすごい」「いくつかの新聞を比べて読むことができるのがよい」等の意見もあった。

B 「新聞記事紹介、意見交換」について

2年間継続して取り組んだことで、生徒にとってより新聞が身近なものになった様子であった。休刊日になると「今日は新聞がないから暇だ」などと、発言するようになった。帰りのホームルームでのニュース紹介も内容が少しずつ変化してきた。昨年度はスポーツの記事に始まり、医療的な内容が中心であったが、今年度は国際情勢や日本の政治についても話をするようになった。これは、社会科で積極的に新聞を扱った成果だと思われる。さらに、事前に一週間分の二社の新聞を持ち帰り、記事の書きぶりの違いについて紹介することもあった。新聞による意見の述べ方の違いや、取り扱い方の違いを指摘し、生徒同士で新たな視点を持って学び合うことができた。

また、クラスには心理的な不安を持つ場面か黙の生徒がいたが、二年間継続して取り組んだことで、見通しを持つことができ、前期の目標に「新聞記事を自分で発表すること」を目標にすることができた。初めは紹介したい新聞記事を切り抜いて、意見をメモ用紙にまとめ、担任が代読する形で発表していた。しかし、何度かそれを繰り返す内に、自然と前に立って、自ら発表すること

ができるようになっていった。「もともと新聞を読むことが好きで、ニュースについて考えることが好きであったこともあり、自信を持って活動に取り組むことができた」ということを後に本人の口から聞くことができた。

C 「スクラップファイルの作成」について

昨年度、スクラップ記事は担当教師が作成していたが、今年度は活動の流れを理解していることから、自分でスクラップシートをまとめるようにした。その結果、休み時間になると、新聞を隅々読み、スクラップシートに意見をまとめている様子がほぼ毎日見られた。使命感を持って活動に取り組んでいた。

また、別の生徒は、新聞を持ち帰り、気になる記事を切り抜くだけでなく、さらにその他の情報を調べて発表するようになった。自分の意見を伝えながら、友人や教師の意見を求めることもしばしばあった。日頃からニュースには強い興味がある生徒であったが、その興味を深める良い機会となった。

4. まとめ

(1) 成果

全学部に活動を周知したことで、新聞活用の意識が少しずつ高まったように思う。また、もともと新聞活用を積極的に取り組んでいた教師の活動を紹介する良い機会になった。その様子を紹介することで、若手職員が「真似をしてみたい」「どんな授業で活用できるか考えたい」という話をするようになった。とても良い連鎖が生まれるきっかけになった。

高等部の生徒にとっては昨年度からの取り組みが広く学校に周知されたことで、さらに励みとなり、活動に責任感が生まれた。また、「自分も発

表してみたい」「新聞を使ってさらに調べてみたい」「新聞は面白い」などという声が聞かれるようになった。

小中学部の生徒も、取り組みについて紹介されたことで、意欲的に新聞を使った学習を進めることができていた。

文化祭でパラリンピックの特集をまとめ、校内のオリジナルスポーツの紹介も併せて行ったところ、来校者にもパラスポーツの面白さを伝えられるきっかけになったように感じた。

また、病院に入院しながら学習を続ける生徒にとって、学習内容を精選する必要がある中で、新聞はとても良い教材になった。その新聞が毎日複数紙学校に配達されるNIEの活動はとても素晴らしいものであった。

さらに、本校に多く在籍する心理的に不安を多く感じている生徒にとって、新聞という端的にまとめられた文章を用いた発表は、精神的な負担も少なく、気軽に取り組めるものであったと思う。

(2) 課題

今年度、高等部の担当者を増員したが、他学部には情報提供を求めるのみになり、小中学部の紹介を継続して取り組むことができなかった。NIEコーナーが2カ所にあることで、全校への周知と高等部の集中した活動は可能になったが、運営する側の負担になった。また、NIEの活動をする機会がある際には、全校で係を割り振り、各学部の中心となる者が必要だと感じた。

また、活動内容が定着したことは良かったが、それ以外の良い取り組みを生徒に紹介する機会を設けることができなかった。授業での活用の様子を定期的に紹介することで、さらに興味関心を広げられたように思う。

(3) 終わりに

2年間の活動を通じて、新聞が身近にあることのありがたさを実感した。朝のSHRの前に、教室に向かうと、教師や生徒が廊下で新聞を読む姿をほぼ毎日見ることができた。新聞を通して、生徒は話題を共有することができたり、興味関心を広めたりすることができた。また、教師も新聞を活用した授業を気軽に実践することができた。

生徒にとって親しみやすいとは言いがたくなっている新聞が毎日届くことで、敬遠していた気持ちも減っていったように感じた。自宅で新聞を取っていない生徒にとっても、非常に良い機会になった。このような機会を与えていただいたことに、心から感謝したい。



2016 (平成 28)年度N I E実践校一覧

	学校名	校長名	実践代表者名	所在地	TEL/FAX	備考	
1	千葉県立佐原高等学校	安藤 清	石毛 一郎	〒 287-0003 香取市佐原イ 2685	0478-52-5131 0478-52-9998	25～ 28年度	継続
2	市川市立大和田小学校	都築 茂	富永加代子	〒 272-0025 市川市大和田1-1-3	047-378-5001 047-378-5032	27・ 28年度	
3	浦安市立富岡中学校	大口 傳	山本 智子	〒 279-0021 浦安市富岡1-23-1	047-352-8477 047-380-4303	27・ 28年度	
4	鎌ヶ谷市立北部小学校	松本 聡	本宮 武憲	〒 273-0132 鎌ヶ谷市栗野 735	047-443-2410 047-443-2400	27・ 28年度	
5	流山市立常盤松中学校	鈴木 明裕	梅津 潤一	〒 270-0114 流山市東初石3-134	04-7152-0842 04-7155-1086	27・ 28年度	
6	銚子市立船木小学校	浅倉真由美	玉崎 宗弘	〒 288-0857 銚子市船木町 140	0479-33-0004 0479-33-2253	27・ 28年度	
7	神崎町立神崎中学校	堀井 英正	磯邊 健	〒 289-0221 神崎町神崎本宿 260	0478-72-3031 0478-72-3213	27・ 28年度	
8	勝浦市立郁文小学校	海老根秀昭	田中 政行	〒 299-5241 勝浦市松部 1000-1	0470-73-0246 0470-73-0352	27・ 28年度	
9	大網白里市立白里中学校	川嶋 哲	川島 浩美	〒 299-3211 大網白里市細草 1385-1	0475-77-2840 0475-77-4694	27・ 28年度	
10	鋸南町立鋸南小学校	鈴木富士夫	安田 淳	〒 299-2115 安房郡鋸南町下佐久間 2500	0470-55-0009 0470-55-0013	27・ 28年度	
11	鋸南町立鋸南中学校	相良 和久	土橋 純也	〒 299-1909 安房郡鋸南町大六 165	0470-55-4111 0470-55-0080	27・ 28年度	
12	千葉県立東総工業高等学校	名取 康雄	高旨 清仁	〒 289-2505 旭市鎌数字川西 5146	0479-62-2522 0479-62-4425	27・ 28年度	
13	千葉県立四街道特別支援学校	日暮 和弘	小関川洋美	〒 284-0003 四街道市鹿渡 934-45	043-422-2609 043-424-4679	27・ 28年度	
14	習志野市立袖ヶ浦西小学校	山下 良之	白戸 雄一	〒 275-0021 習志野市袖ヶ浦1-1-1	047-451-2423 047-451-2424	28・ 29年度	新規
15	野田市立東部中学校	飯森 淳	綿引 尚人	〒 278-0001 野田市目吹 1500	04-7122-3015 04-7122-3371	28・ 29年度	
16	八街市立笹引小学校	内山 茂樹	佐藤 一馬	〒 289-1113 八街市八街へ 199-133	043-444-0049 043-444-0467	28・ 29年度	
17	茂原市立早野中学校	若菜 功	高橋 利子	〒 297-0037 茂原市早野 206-1	0475-25-0951 0475-25-9375	28・ 29年度	
18	南房総市立富浦中学校	石井 教宇	入野 祐一	〒 299-2416 南房総市富浦町青木 249-1	0470-33-2075 0470-33-4729	28・ 29年度	
19	千葉市立打瀬中学校	千葉 恆胤	石井 美佳	〒 261-0013 千葉市美浜区打瀬 3-12-1	043-211-0344 043-299-2832	28・ 29年度	
20	専修大学松戸高等学校	小泉 毅	山口 恵子	〒 271-8585 松戸市上本郷 2-3621	047-362-9101 047-362-9104	28・ 29年度	

平成28年度 千葉県N I E推進協議会 役員

会	長	藤川大祐	千葉大学教授・教育学部副学部長
副	会長	池田文彦	千葉県小学校長会会長
副	会長	柴内靖	千葉県中学校長会会長
副	会長	鈴木政男	千葉県高等学校長協会会長
顧	問	内藤敏也	千葉県教育委員会教育長
顧	問	志村修	千葉市教育委員会教育長
幹	事	山宮まり子	千葉県小学校長会副会長
幹	事	羽山稔彦	千葉県中学校長会副会長
幹	事	田村幸子	千葉県高等学校長協会副会長
幹	事	佐藤晴光	千葉県教育庁指導課主幹
幹	事	長谷川由美子	千葉県教育庁指導課指導主事
委	員	栗原健太郎	朝日新聞社 千葉総局長
委	員	菊池一郎	産経新聞社 千葉総局長
委	員	小國智宏	東京新聞社 千葉支局長
委	員	清水省吾	日本経済新聞社 千葉支局長
委	員	武田則秋	日刊工業新聞社 千葉支局長
委	員	千代崎聖史	毎日新聞社 千葉支局長
委	員	今野英治	読売新聞社 千葉支局長
委	員	光石連太郎	時事通信社 千葉支局長
委	員	木下貴史	共同通信社 千葉支局長
委	員	中元広之	千葉日報社 編集局長
監	査	(原則、各新聞社による九社会幹事)	
アドバイザー		石毛一郎	県立佐原高等学校教諭
アドバイザー		内山浩史	県立佐倉高等学校教諭
アドバイザー		松井初美	香取市立小見川中学校教諭
アドバイザー		武藤和彦	市川市立市川第二中学校教諭
アドバイザー		神尾啓子	千葉県新聞教育研究所
事務局	長	渡辺 鉦	千葉日報社読者サービス室長

2017 (平成 29)年度N I E実践校一覧

	学校名	校長名	実践代表者名	所在地	TEL/FAX	備考	
1	市川市立大和田小学校	青山 了司	流 雄希	〒 272-0025 市川市大和田 1- 1- 3	047-378-5001 047-378-5032	27～ 29年度	継続
2	野田市立東部中学校	飯森 淳	伊藤 圭哉	〒 278-0001 野田市目吹 1500	04-7122-3015 04-7122-3371	28・ 29年度	
3	八街市立笹引小学校	内山 茂樹	佐藤 一馬	〒 289-1113 八街市八街へ 199- 133	043-444-0049 043-444-0467	28・ 29年度	
4	茂原市立早野中学校	若菜 功	市原 剛志	〒 297-0037 茂原市早野 206- 1	0475-25-0951 0475-25-9375	28・ 29年度	
5	南房総市立富浦中学校	袴田 晃宏	小池 宏	〒 299-2416 南房総市富浦町青木 249- 1	0470-33-2075 0470-33-4729	28・ 29年度	
6	千葉市立打瀬中学校	小川 好信	石井 美佳	〒 261-0013 千葉市美浜区打瀬 3- 12- 1	043-211-0344 043-299-2832	28・ 29年度	
7	専修大学松戸高等学校	小泉 毅	山口 恵子	〒 271-8585 松戸市上本郷 2- 3621	047-362-9101 047-362-9104	28・ 29年度	
8	八千代市立勝田台南小学校	吉原 幸子	掛川 良治	〒 276-0023 八千代市勝田台 5- 9	047-483-0286 047-483-0022	29・ 30年度	新規
9	船橋市立芝山中学校	日高祐一郎	駒野 和典	〒 274-0816 船橋市芝山 1- 40- 11	047-464-3448 047-464-3449	29・ 30年度	
10	我孫子市立我孫子第三小学校	野口 恵一	浅水 美記	〒 270-1176 我孫子市柴崎台 3- 3- 1	04-7184-1171 04-7184-1180	29・ 30年度	
11	松戸市立新松戸南中学校	小出 斉	横川 徹	〒 270-0035 松戸市新松戸南 2- 124	047-344-0188 047-345-0626	29・ 30年度	
12	富里市立日吉台小学校	松島 馨	滝澤 文洋	〒 286-0201 富里市日吉台 4- 21	0476-93-6369 0476-93-6364	29・ 30年度	
13	旭市立干潟中学校	鈴木 弘	杉山耕一郎	〒 289-0515 旭市入野 2170	0479-68-2456 0479-68-4139	29・ 30年度	
14	いすみ市立東海小学校	田中 憲生	大高 純子	〒 298-0001 いすみ市若山 1042	0470-62-0269 0470-62-4290	29・ 30年度	
15	山武市立蓮沼中学校	井内 毅	千田 賢弥	〒 289-1806 山武市蓮沼ハ- 1036	0475-86-2037 0475-86-2176	29・ 30年度	
16	富津市立天神山小学校	鈴木マユ美	植田 正代	〒 299-1618 富津市花輪 104	0439-67-0062 0439-67-2060	29・ 30年度	
17	富津市立大貫中学校	和田 俊昭	三平 正美	〒 293-0043 富津市岩瀬 619	0439-65-0053 0439-65-2124	29・ 30年度	
18	千葉市立大森小学校	黒川 章子	山本 慧一	〒 260-0811 千葉市中央区大森町 268	043-261-3445 043-268-5886	29・ 30年度	
19	千葉市立磯辺中学校	増澤 保明	櫻井 翔	〒 261-0012 千葉市美浜区磯辺 7- 1- 1	043-279-2891 043-278-4913	29・ 30年度	
20	千葉県立成田国際高等学校	渡邊 信治	宮本 修	〒 286-0036 成田市加良部 3- 16	0476-27-2610 0476-26-7154	29・ 30年度	
21	千葉県立桜が丘特別支援学校	佐々木隆之	石川 美雪	〒 264-0017 千葉市若葉区加曾利町 1538	043-231-1449 043-231-3069	29・ 30年度	

平成29年度 千葉県 N I E 推進協議会 役員

会 長	藤 川 大 祐	千葉大学教授・教育学部副学部長
副 会 長	藤ヶ崎 功	千葉県小学校長会会長
副 副 会 長	羽山 稔彦	千葉県中学校長会会長
	百瀬 明宏	千葉県高等学校長協会会長
顧 問	内藤 敏也	千葉県教育委員会教育長
顧 問	磯野 和美	千葉市教育委員会教育長
幹 事	小林 久子	千葉県小学校長会副会長
幹 事	本山 哲也	千葉県中学校長会副会長
幹 事	小野 祐司	千葉県高等学校長協会副会長
幹 事	片岡 通有	千葉県教育庁指導課主幹
幹 事	渡 邊 安規	千葉県教育庁指導課指導主事
委 員	村上 宣雄	朝日新聞社 千葉総局長
委 員	菊池 一郎	産経新聞社 千葉総局長
委 員	小國 智宏	東京新聞社 千葉支局長
委 員	池内 新太郎	日本経済新聞社 千葉支局長
委 員	篠瀬 祥子	日刊工業新聞社 千葉支局長
委 員	千代崎 聖史	毎日新聞社 千葉支局長
委 員	森 昭雄	読売新聞社 千葉支局長
委 員	佐々木 昌巳	時事通信社 千葉支局長
委 員	高 橋 潤之	共同通信社 千葉支局長
委 員	中 元 広之	千葉日報社 編集局長
監 査	(原則、各新聞社による九社会幹事)	
アドバイザー	石 毛 一 郎	県立佐原高等学校教諭
アドバイザー	内 山 浩 史	県立佐倉高等学校教諭
アドバイザー	松 井 初 美	香取市立小見川中学校教諭
アドバイザー	武 藤 和 彦	市川市立東国分中学校教諭
アドバイザー	神 尾 啓 子	千葉県新聞教育研究所主宰
事務局 長	渡 辺 鉦	千葉日報社読者サービス室長